
リリカルなのは アナザーダークネス

観測者と語り部

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカルなのは アナザーダークネス

【Nコード】

N4631Z

【作者名】

観測者と語り部

【あらすじ】

少女の犠牲によって憎しみと悲しみの連鎖は終わるはずだったが、しかし、犠牲になった少女自身が憎しみを抱かないとは限らない。

次元の彼方から少女は還ってきた。心に灯す復讐の焰を爆発させるために。

果たして、憎しみの連鎖を止めることは出来るのだろうか？

prologue「憎しみの始まりなの」(前書き)

一度、修正しました。

皆さん初めまして。

語り部です。

この小説を完結まで頑張って書きたいと思いますので、最後までお付き合いただければ幸いです。

誤字脱字、謎の文体が目立つかもしれませんが、その時は報告をお願いします。

OPテーマ曲は「どんなときでも、ひとりじゃない」

prologue「憎しみの始まりなの」

時の庭園。

ブレシア・テストロッサがアルハザードへたどり着くために意図的に起こした次元震は、時空管理局と高町なのはやフェイト・テストロッサによる尽力によって最悪の事態を引き起こす事なく幕を降ろした。

しかし、ジュエルシードによって引き起こされた次元震。その力は一時的とはいえ、時空に亀裂を発生させ、虚数空間の入り口を開けていた。

この時、時空管理局のアースラは次元震の対処に追われて気が付くことが出来なかった。虚数空間から偶然。いや、意図的に意志を持つて現れたロストログアの存在に。

side ???

（憎い！憎い！憎い！）

その存在は心に憎しみをため込んでいた。憎悪は心を焼き尽くす焰となって存在に力を与える。

（憎いぞ、時空管理局！我から日常を奪った時空管理局！！）

その存在は怒り狂っていた。ささやかな日常を奪われた怒り、そし

て、悲しみが負の感情を増幅させ、更なる憎しみを呼ぶ。

（許しはしない！我を騙し！我を裏切った　・　！）

その存在は信じることを忘れた。かつて、自分を支えてくれた人は結局は自分を騙し続け、信頼していた心を踏みにじられたから。

（同じ目に遭わせてやりたい！我の目の前で家族を消し去った
・　のヤツに！）

その存在は優しさを失った。
かつて温もりを与えてくれた家族を復讐という理由で奪われたから、復讐されて傷ついた心は養分となって新たな復讐の誓いを芽生えさせた。

（許しはしない！我だけでなく罪無き友を抵抗しただけで我もろとも封じた時空管理局！お前たちを許しはしない！必ず我らが滅ぼしてくれる！！）

その存在は笑顔を失った。弱り果て苦しむ自分を励ましに来た四人の友。大を救うための犠牲として巻き込んで死なせてしまった友。自責の念と罪悪感喜びと楽しみの感情を奪い、侮蔑の笑みしか浮かべなくなった。

その存在は力を解放すると転移魔法を発動させる。
ジュエルシードの巨大な魔力が転移魔法の魔力をアースラから隠し、その存在がいた事を知らせる事はなかった。

後の闇の書事件は最悪の形で展開する事になる。アースラがこの存在に気が付いていれば事態が変わったかもしれないが、もう、遅い。

憎しみの連鎖が再び始まろうとしていた……

prologue「憎しみの始まりなの」(後書き)

エンディングテーマは「対象a」

には名前が入ります。

それでは誤字脱字報告、感想をお待ちしております。

第1幕 「少女（かけら）たちの誓いと旅立ちです」（前書き）

文章量をもっと増やした方が良いですかね？

第1幕 「少女（かけら）たちの誓いと旅立ちです」

side ???

とある管理外世界。その世界の白銀の地に彼女は降り立った。辺りは雪が降り注ぎ、大地は白く輝いている。その光景の中で少女が空からゆつくりと地上に降り立つ所を他人が見れば天使が舞い降りたと錯覚したかもしれない。

もつとも、今の時刻は深夜であり、この寒さが厳しい世界で、北に位置する場所。しかも、高い山と深い森の奥深くに隠されたように存在する盆地を訪れる人間は余程の事がない限り存在しないだろう。

少女の姿は異質だった。毛先が黒い白銀の髪に闇を凝縮したような瞳。背中には六枚三対の漆黒の翼を生やし、右手に十字をあしらった背丈と同じくらいの長さを持つ杖を、左手に禍々しい雰囲気を放つ本を抱え、さながら墮天使を彷彿とさせる姿をしている。

少女は左手に持った本から手を離す。すると本はひとりでに浮かんで少女の目の前に移動した。そして、本は凄まじい勢いでページを捲る。少女が求める力を引き出す為にページに記された魔法を探し出しているのだ。

やがて、目的のページまで捲り終わり少女に必要とされる魔法を映し出す。それを見た少女は右手の十字杖を正面に構え横に掲げる。足元に紫色の三角形をした魔法陣が浮かび上がり、リンカーコアか

ら力を引き出す。

発動させた魔法は小さな隠蔽結界。少女がこれから起こす大魔法を外に漏らさないように張った小さくも強力な力を秘めた結界である。

次に少女は開いた左手を本に向ける。すると本は真ん中のページを開き、表紙を少女の方向に向けるように反転した。そして、紫黒の輝きを放つと少女の目の前に同じ大きさの氷塊を四つ吐き出した。

氷塊の大きさは少女の身体より少し大きい程度で、まるで、棺のような形をしている。

少女は溜め息を吐くと、小さく呟いた。その顔は無表情だが泣いているように見える。

「お前たちには悪いことをした。我の厄介事に巻き込まれ、死なせてしまった事はどれだけ赦しを請うても赦されぬ、我の最大の罪にして罰であろう」

少女は嘆く、二度と赦されぬ罪に苦しみ、されど、涙を流すことは許されない。

「だが、許してほしい。我の身勝手な目的の為に前たちのリンカーコアを利用することを」

少女は慟哭する。罪無きかつての友の体を利用する罪悪感に、力無き自分の弱さに。

「それに、我は独りが寂しい。あの幸福を知ってしまった今では刹那の孤独にすら耐えられぬ。かつての家族を取り戻す事もはや叶

わぬ」

少女は誓う。身勝手な自分に付き合わせる、新たな存在を満足させる行為が、かつての友が望む願いを叶えることが少しでも贖罪になると信じて。

「だから、誓おう。お前たちが例え私の行為を否定し、裏切ったとしても我はお前たちの願いを出来る限り叶えることを。例え、偽善だと言われても我は私の意志をつらぬこう」

そして、少女は大きく息を吸うと叫んだ。心に秘められた苦痛を少しでも吐き出すかのように叫んだ。

「さあ！蘇れ！！新たな力と秘められた力を融合させ新たな存在として！」

少女の叫びに呼応するかのように本から四色の光が飛び出す。

ひとつは熱き炎を宿し、強さと決断力を備えた忠義を秘めし桃色の光。

ひとつは無邪気さと子供らしさを秘め、大切な存在を守るために必死になる紅き光。

ひとつは優しさと残酷さを備え、皆を影から支える緑の光

ひとつは寡黙の内に熱き心を宿し、自らの危険を省みず仲間を守護する蒼き光。

四つの光は少女に挨拶するかのように周囲を飛び回ると、四つの氷塊に閉じこめられた人物の胸の内にそれぞれ飛び込んで行く。

そして、再び外へ飛び出した四つの光は本の中へと戻っていった。本は光を内側にしまい込むと、そのページを閉じて再び少女の左手に戻る。

次に少女は十字杖をペンダントに戻して首に掛けた。本を両手で抱え、正座をしながら目を閉じて集中する。

内側に取り込んだ四つの光を新たな存在にする為に少女は大魔法を発動させる。少女のリンカーコアが力を引き出す為に、輝きを増し、熱さを伴って胸の内側で暴れる。しかし、その感覚ですら少女は心地よく感じた。

今の周囲には人の身に余る膨大な魔力が溢れている。少女が事前に隠蔽結界を張らなければ、巡回している管理局が気が付いて捜査を開始していただろう。

今、本の内側では新たな存在が闇に包まれて生まれようとしていた。活発な光を放つ真紅のリンカーコアと熱き炎を持つリンカーコアは引かれ合うように融合した。

紫電をまとう黄色いリンカーコアは自ら積極的に紅きリンカーコアを取り込み、無邪気に新たな輝きを放つ。

桃色の巨大な光を放つリンカーコアは弱々しく明滅して輝き、緑のリンカーコアが癒すように周囲を飛び回りながら、ゆっくりと少しずつお互いに融合していく。

淡い紫色のリンカーコアは戸惑うように輝いていたが、やがて落ち

着きを取り戻し、静かに蒼き輝きを放つリンカーコアと融合した。

本の中で巨大な力が渦巻きプログラムを無数に構築する。膨大な力が少女のリンカーコアを圧迫し、魔力を喰らい弱らせる。少女は全身に苦痛を感じ、身体に熱さを伴うが、歯を食いしばって必死に耐え、魔法を制御していた。この魔法を失敗させれば少女の耐え過ぎた悠久の時間が無駄になってしまうから。だから、全身を襲う苦痛も身体にまとりつく不愉快な汗の存在も少女は無視して魔法を必死に制御する。

やがて融合は終わり、本の中で新たな四つの存在が生まれる。
ひとつは活発な輝きを放ち内側に焰を宿す黄金のリンカーコア。

ひとつは紫電を纏い無邪気に輝く水色のリンカーコア。

ひとつは膨大な魔力を秘めし巨大な光を放つ暁のリンカーコア。

ひとつは落ち着いた輝きを放つ、静かな雰囲気を纏った淡い紫色のリンカーコア。

新たな存在として生まれた四つのリンカーコアは自信の肉体を闇の中で構築して行く。

魔法を操作していた少女も落ち着きを取り戻し、静かに左手で汗を拭う。後は本に秘められた意志と少女自身がサポートを続ければ四つの存在は勝手に生まれてくるであろう。

（私の新しい親友、私の新たな家族。早く生まれるが良い。もはや何の価値もない世界では、お前たちの存在だけが私の支えだ）

この時だけ無表情の少女は忘れたはずの優しい微笑みを浮かべていた。もっとも、少女自身は気が付いていなかったが。

静寂に包まれた白銀世界。雪の降り積もる地で静かに儀式魔法は続く。

第1幕 「少女（かけら）たちの誓いと旅立ちです」（後書き）

少女と二つのリンカーコアは分かると思います。残る二つはオリキヤラです。

次はなのは side ですが、日常を上手く書ける自信はありません

誕生したのは4人の守護騎士です（前書き）

まずは皆様に土下座を致します。すいませんでした。作者もこれほど更新が遅れるとは思いませんでした。深くお詫びします。

作者の文才の無さに絶望し、GODをプレイしてマテ子たちの印象が変わり、プロット変更中です。そして、レヴィよ。なぜ暴走する。話が進められないorz

誕生したのは4人の守護騎士です

side ???

雪降る白銀世界。静寂に包まれたこの世界。しかし、世界の静寂は今、破られようとしていた。

少女は歓喜に包まれている。新たな存在が少女の目の前で生まれたからだ。禍々しき本から生まれた四つの存在。その姿は少女の生前の友と瓜二つの姿をしていた。

少女は四つの存在を愛おしそうに見つめる。

一人は暗い茶色の髪を肩まで伸ばした少女。私立聖祥大学付属小学校の制服に似たバリアジャケットを身にまとっている。しかし、その色は黒く、リボンの色も夜の色をしている。浮かべる表情は無表情で冷たい雰囲気纏っているが、彼女を見つめる少女には泣いているようにも、後悔しているようにも見えた。

少女は次に二人目の存在に目を向ける。

今度は毛先が黒い青色の髪を、青色のリボンでツインテールにまとめた少女。何を考えているのか分からないが、表情は明るくニコニコと笑顔を浮かべている。バリアジャケットは元になった少女と対して変わらないようだ。

さらに、隣の存在に少女は目を向ける。先程の少女が「カッコイイ自己紹介すらしてないのに、ボクを無視するな〜！」とか、矢継ぎ早に喋っているが話が進まないので無視する。

今度は先程と違い、明るい燃えるような金髪をした少女。所々紅いリボンで髪を縛り、私立聖祥大学付属小学校の制服をチャイナドレスにアレンジしたようなバリアジャケットを着ている。その色はやはり黒い。そして、腰には刀型のアームドデバイスを差していた。

表情には勝ち気な笑顔が浮かび、小さな胸を堂々と張って偉そうな格好をしていた。

少女は内心で、我より偉そうにするな、とツツコミをしながら最後の存在を見つめた。青色が「ボクより偉そうにするな　、ボクの存在感を返せ」とか叫んでいるが気にしない。

最後の存在は困惑した表情を浮かべている少女だ。

紫色の髪をカチューシャで纏め、元になった存在とは違う色の瞳。紅い瞳に時折、変色を繰り返すのは力を上手く制御出来ていないからだろう。

バリアジャケットは漆黒のイブニングドレスに所々フリルをあしらっており、長い漆黒のドレスグローブは強い魔力が込められた武器だ。

頭には髪の色と同じ大きな獣耳が、狼の耳が生えている。ドレスに隠れて見えないが、恐らく狼の尻尾も生えているだろう。

四人とも闇を凝縮した瞳をしており、生気を感じさせない、冷たい死の雰囲気から感じられた。

やがて、四人の存在を見回した少女は口を開いた。

「初めまして、名も無き新たな守護騎士たち」

少女が挨拶をすると四人の新たな守護騎士は雪の上に跪いて挨拶を交わす。

「初めまして、我らの新たな主」

「初めまして！会いたかったよ　　」！」

「初めましてね、こんな寒い所で生まれるなんて思いもしなかったけどね！」

「初めまして、うう、なんで獣耳と尻尾が生えてるのかな」

四人は口々に挨拶を返すと新たな主の顔を見た。その表情は悲しみに満ちていて、四人はどうして良いか分からず困惑する。
主たる少女が悲しげな表情で呟く。

「　　か、懐かしい名前だ。我がその名で呼ばれたのは何年前だったか」

主の呟いた内容を聞き、青色の少女に様々な意味が込められた三人の視線が痛いほど突き刺さり、青色の少女はうなだれた。
その様子を見た、主たる少女は青色の少女を助けるために再び、言

葉を発する。

「気にするな、我は気にしておらぬ、お前たちもそやつを責めるでない。だが、
の名。これから行ふ復讐には相応しくない名だ」

やけに復讐の言葉を発した主たる少女に茶色の髪 of 少女は眉を歪めた。だが、それも一瞬の事で気が付いた者はいない。金髪の少女を除いて。

「そうだな、手始めに我を含めて、新たな名を決めるとしよう」

主たる少女は完璧な動作で跪いている茶色の髪をした少女を向く。すると、顔を向けられた少女は頭を垂れた。

「そう畏まるな、理のマトリアルよ。そうだな、生前の戦い方から……ふむ、よし！ 今日からおまえの名は星光の殲滅者。シュテル・ザ・デストラクターと名乗るがいい」

「星の光を以て敵を殲滅する者、私に相応しき名です。ありがたく頂戴致します。我が主よ」

主たる少女はシュテルの変わらぬ畏まった態度に内心ため息を吐くが、それが、この子の個性なのだろうと諦めた。出来れば家族の欠片を継承する彼女たちには親しく接しては欲しいのだが、主たる少女は、この問題は後々解決策を探すと後回しにして、青色の少女に目を向ける。

青色の少女は見つめられると、顔を輝かばかりにキラキラさせ、瞳は期待に満ちていて、主たる少女は若干引く。それでも、期待には応えねばと彼女は頭を捻っていたが、先に青色の少女が口を開いた。

「実はボク、もう自分の名前は考えてあるんだ！」

「ほう、申してみよ」

青色の少女が考えた名前、それに多大な期待と興味を主たる少女は抱いた。我が子であり、家族であり、友の一人である少女がどんな名を考えたのか、物凄く気になるのだ。もっとも、他の三人の守護騎士は青色の言動からイヤな予感を感じている。

青色が立ち上がり、左手を腰に当て右手の親指で自身を差しして新たな名を言い放った！

「ボクの新たな名！偉大なる名を聞いて驚け！」

「……その名は？」

「疾風迅雷の化身！スーパーウルトラデラックスライトニング！」

白銀世界。雪が降り積もり、静寂が支配する世界に真の静寂が訪れた。主たる少女はバリアジャケットによって感じない筈の寒さを感じた。他の守護騎士も同様で、金髪の守護騎士は呆れすぎて倒れたし、シュテルなんて壊れたように「
ちゃんがコワレテル：

……ちゃんが……」と、うわ言のように繰り返している。

肝心の青色本人は、ふふん、どうだい？かつこよいだろう！と言わんばかりに勝ち誇った笑みを浮かべている。

やがて、最初に立ち直ったのは主たる少女。身体が小刻みに震え、

青色を指さすと溢れんばかりの怒声をあげた。

「そんな！恥ずかしゅうて、訳の分からへん名前！誰が許可するんか！..」

その声量と溢れ出る怒気に青色の少女は思わず竦み震え上がる。本当なら拍手喝采に包まれるはずが怒鳴られたので、訳も分からず震える。

「ひゃいッ！でもでも……せつかく考えたカツコイイ名前なのに……」

「却下や！却下！！真剣に期待した私がアホやった……」

主たる少女は肩で息をするほどに脱力する。思わず杖を付いてしまった程だ。生前のオリジナルは大人しく聡明な子。元にした素体から、こんなアホの子が生まれるなんて誰が予想しただろうか。

（いや、 ちゃんは天然な所があつたし、 は子供ぽかった。可能性があつたとはいえ、これ程とは。我に矯正出来るのだろうか……）

あらゆる意味で気力を使い果たした四人の少女と、名を却下されうなだれる少女。主たる少女は気を取り直すと、咳払いをして皆の注目を集めた。

「今の出来事は私の記憶から消す。何もなかった、そうであろう？」

主の問いに青色の少女を除く三人は頷いた。

「しかし、困ったものだ。どんな名が相応しいのか思い浮かばぬ。なまじ格好悪い名ではこやつも満足せぬであろう」

主の悩み。それに答えたのは星光の殲滅者シュテル。彼女はうなだれる青色の少女を横目で見ながら主たる少女に意見した。

「では、私の名と同じく彼女の戦い方から名を付けるのが良いと思います。そうですね、雷刃の襲撃者、レヴィ・ザ・スラッシャーなどは如何でしょう」

「ふむ、悪くないな。ほれ、いつまでも、うなだれとらんでしつかりせい」

「ほえ？」

「今日からお前の新たな名は雷刃の襲撃者、レヴィ・ザ・スラッシャーだ！光栄に思うが良い、我とシュテルが決めた新たな名を」

「雷刃……スラッシャー……とつてもカッコ良い名前だ！ありがとう！大切にしよう！！」

その時のレヴィの笑顔は太陽のような眩しい笑顔で、思わず微笑んだ四人だった。

「さて、残りの守護騎士にも新たな名を与えねばならぬ。しかし、困ったことに良い名が思い浮かばぬ」

主たる少女の言葉に名を付けられていない二人もつられて困った顔をする。シュテルは主たる少女の言葉を聞くと、頷いて返事をした。

「確かに私やレヴィは生前の戦い方から名を頂きました。しかし、残りの二人は戦闘経験もなく知識として戦い方を知っている程度。同じ方法で名を付けるのは困難だと思います」

「ぬう……………」

シユテルの言葉を聞き、ますます悩み頭を抱える主たる少女。そんな様子の彼女に助け船を出したのは、皆の様子を黙って見ていたレヴィだった。

「ねえねえ！ボクが名前を提案するよ！いいでしょ！」

「さっきみたいに恥ずかしい名前だったら、アンタをぶっ飛ばすからね！」

レヴィの言葉に金髪の少女が一応、釘をさしておく。金髪の少女は恥ずかしい名前を付けられるのは己のプライドが許さないし、何より後の黒歴史として他の四人にネタにされるのは嫌だった。

金髪の少女にレヴィは、大丈夫、大丈夫と答えたと、上目遣いに主たる少女を見つめた。

「ねえ……………いいでしょ……………」

（くっ、その表情は卑怯だぞレヴィ。そんな顔をされたら我が断りきれぬではないか……………）

主たる少女は別の意味でさらに悩む。レヴィは先程の自身の名を語った時の前科がある以上、ろくな名前ではない気がする。もし、厨二病全開の名前だったら金髪の少女と揉め事になり、面倒な事態に

発展するだろう。だが、断れば……。

（断れば……恐らく子供っぽいレヴィのことだ。きっと、いや、絶対に泣き喚くであろうな……）

どうすれば良いのだ！と主たる少女は内心で叫び、悩みに悩んで結論をだした。

（こうなれば、仲間を頼るしかあるまい。念話はレヴィにも聞こえてしまう、なれば、アイコンタクトで意志を通じ合う！）

以下、主たる少女とレヴィを除く守護騎士たちのアイコンタクトの内容である。

シュテルの場合

（シュテルよ何か良い名案は無いのか、我は決断を迷っておる）

（ありません。主よ）

（速答だと！貴様、それでも理の MATERIAL であろう？主たる我に名案のひとつでも出して、我を助けてくれ）

（無理です。以上）

（この薄情者めが……！）

（……………）

金髪の少女の場合

（　　よ、何か良い案はないか？）

（とりあえず、怒らないから喋らせてみなさい）

（良いのか？）

（べつ別に…アンタが困ってるから助け船を出した訳じゃないんだからね、うう……だいたい…）

（頬を赤らめて、もじもじしてる姿しか分からぬ）

紫色の髪の子女の場合

（　　よ、何か良い名案はあるか？）

（ううん、一度喋らせてみるしかないかなあ）

（やはり、それしか方法はないか？）

（うん、下手に断るとレヴィちゃんが泣いちゃうと思うから）

（だろうな……よし！我は決断した。貴重な意見を感謝する）

（がんばってね）

こんな感じで彼女たちは瞬時に意志疎通を行い、主たる少女は迷いを断ち切り、決断する事が出来た。

主たる少女は再びレヴィに目を向ける。レヴィの顔は花が咲かんば

かりにキラキラと輝いていて、彼女がどれほど主たる少女に期待を抱いているのか分かるくらいだ。

「レヴィよ、お前の意見を述べてみよ」

「いいの？」

「構わぬ、今はどんな意見でも取り入れるべき時、正直に言えば、気が乗らぬが仕方あるまい」

「わーい！ありがとう　　ゝゝ！」

意見を述べる許可を許されたレヴィはその瞬間、大きく喜び、主たる少女に抱きついた。

「こらっ！抱きつくでない！暑苦しいであろうが！！」

主たる少女はそう言ってもがくが、本気で振りほどく様子はなかった。どうやら悪い気はしないらしく、実際に少し照れているのが、やや赤くなった頬から感じ取れる。

「主よ、話が進まなくなります。戯れも程々になさってください」

その様子を見ていたシュテルが話を進めるために止めに入った。言葉に若干の棘が在るのは嫉妬しているのだろうか、それは、シュテル自身にも分からなかった。

主たる少女はレヴィをなだめると咳払い一つして、再び跪いたレヴィに目線で申してみよ、と伝える。レヴィはそれに頷くと新たな名を伝える。

「バーニング とナイトメア 」

レヴィが考えた名前を聞いて悩む三人の少女たち。悪くはない名前ではあるが、問題点もあったのだ。

ニコニコと笑うレヴィを見ながら、最初に悪い部分を指摘したのは主たる少女。

「お前の考えた名前は存外、悪くはない」

「じゃあ、採用してくれるの!？」

「話を最後まで聞かぬか!しかし、かつての名前が入っているのは頂けぬ」

「あっ……………」

主たる少女の指摘を受けて、しまったという表情をするレヴィ。その顔を心の内で呆れながら無表情にシュテルが話を続ける。

「それにミッドチルダ語が使われているのも減点です。私やレヴィはベルカ語なので言葉を合わせましょう」

「ガーン……………」

容赦ない二人の指摘に雪上でうなだれるレヴィ。先ほどまであった自信は見事に消失してえり、どんよりした雰囲気放っていた。

それを見かねた金髪の少女がフォローを入れる。その役目は昔から

少女が得意としていた分野だ。

「まっ、あんたの考えた名前も私たちの的を得ていて良かったわよ、別に全部を否定してるわけじゃないんだから、しょぼくなくても良いじゃない」

「でもでも……………」

金髪の少女のフォローを受けて少し立ち直ったレヴィ。そんな様子の彼女を完全に立ち直らせるために言葉をかけたのは紫色の髪の少女。いつだって彼女の役割はみんなを支えることだ。

「それじゃあ、レヴィちゃん。レヴィちゃんが考えた名前をもっとカッコ良くする為に皆で考えるのはどうかな？」

「もっとカッコ良く……………？みんなで考える……………？」

「そう。みんなで頑張ろう？」

「うん！ボクもみんなと一緒にがんばる！」

二人の励ましを受けて見事に立ち直った様子のレヴィ。その様子を見て、悪くない関係だと主たる少女は思っただった。

「バーニングとナイトメアか」

主たる少女の呟き。その言葉を理のマテリアルであるシュテルが解説してくれる。

「燃え上がる炎と悪夢という意味ですね。ベル力語に変換するとア
オフ・ローダーンとアルプ・トラウムになります」

（うわぁ…………）

（なんか、ダサイわね）

（なんだかカッコ良くて、キレイな名前じゃないな）

正直に言えば名前には向いてない言葉だった。むしろ名字と言う方が聞こえが良く、レヴィですら内心で少女らしくない名前だと考えるほどだ。

（やはり、ベル力語のみに限定するとダメか）

そんなふうを考える主たる少女に手を挙げて発言の許可を求める少女がいた。金髪の少女だ。

「提案があるわ」

「申してみよ」

「正直、このままじゃ何時までたっても意見が進まないわ。私たちの名前は自分で考えるから、決まった名前をアンタが再び命名してちょうだい」

確かに少女の言うとおり、このまま話を続ければグダグダになる可能性も十分あり得る。ここは、生前で頭が良かった彼女に任せるのも良いだろう。別に自分が考える必要もないのだ。

主たる少女はそう考えると頷いて許可を出した。

「良かるう。だが、考えた名前は我に耳打ちして教えるのだぞ？」

「わかつてるわよ」

こうして、金髪の少女と紫色の髪の少女は相談を始める。レヴィやシュテルと離れて円陣を組んで話す様子は、小さな子供が内緒話をしているように主たる少女には見えた。そして同時に主たる少女は自身の考えから自責の念にとらわれた。

（あの微笑ましい様子でさえ、かつての学校生活では当たり前のこと、それを奪った我は外道にも劣る極悪人か…………）

その少女の様子を見たシュテルとレヴィは無意識に手を強く握りしめ、どこか思いつめたように歯を食いしばった。

やがて、考えが纏まったのか金髪の少女が代表して主たる少女に耳打ちする。金髪の少女の言葉を聞いた主たる少女は驚いた顔をしたが、それも一瞬の事で、すぐに真顔に戻る、そして、再び跪いた少女たちに顔を向けた。

少女が名を告げる。堂々と言葉を発するその姿、雰囲気は王としての威圧感とカリスマ性に溢れており、他の者がいれば自然とひれ伏してしまいそうだ。

まず、主たる少女は金髪の少女に告げる。新たな名と存在を与える。

「お前の新たな名は炎の鳥。アスカ・フランメフォーゲルだ。私の剣となり我が前に立ちほだかる敵を焼き尽くし、我が道を明るく照らすのだ」

「その言葉、アスカ・フランメフォーゲル。確かに拝命いたしました」

今行われているのは神聖な儀式だ。少女たちの新たな旅立ちの前の準備。故にレヴィですら静かに言葉を聞く。

主たる少女は次に紫色の髪の少女に顔を向ける。紫色の髪の少女はドレス姿や美しい顔立ち、上品な仕草と相まって、主たる少女が油断すれば逆に引き込まれそうだ。アスカを騎士とするならば彼女は姫だろうか。

主たる少女は姫の気配に吞まれぬよう言葉を発する。

「お前の新たな名は夜の守護者。ナハト・ヴィルヘルミナだ。その力で我らを守り、我らを支えて欲しい」

「はい、ナハト・ヴィルヘルミナ。この命を持って、みんなを護りましょう」

そして、その神聖な儀式ももうすぐ終わる。全ての者が名を与えられた時、シュテルが主たる少女に声をかけた。

「主よ。私とレヴィも先程まで主の新たな名を考えました。受け取ってくださいか？」

主たる少女はシュテルの言葉を聞いて呆けた表情をしていたが、言

葉の意味を理解すると嬉しそうに微笑んで頷いた。

「申してみよ」

「では、我らの主。その新たなる名は闇統べる王。ロード・ディア
ーチエ」

「偉そうで、実際ものすごく偉いボクらの王様」

「王か……。よかろう。我は闇統べる王！ロード・ディアーチエ！
お前たちを導き、管理局に破滅を告げるものだ！」

ディアーチエの宣言と共に結界内部を風が荒れ狂い、雪上を乱した。
今、少女たちの神聖な儀式は終わりを告げ、管理局に対する戦いの
幕が静かに上がるうとしていた。

誕生したのは4人の守護騎士です（後書き）

次回は短めですので一週間くらいであげられそうです。

それがディアーチエの願いですか（前書き）

お待たせしました。短いと言っておきながら、たいして変わらない文章量に絶望した。

それがディアーチェの願いですか

ディアーチェの宣言も終わり、皆の名前が決まった後に、少女たちは新たな方針を考えていた。

「まず、我らの目標だが時空管理局に対する復讐だ。異議のあるものは申し立てよ」

ディアーチェの言葉に守護騎士たちは驚かない。生み出された瞬間に少女たちは自身が何の為に生み出されたのか、その理由を知っているからだ。

「ボクは王様の意見に賛成。今すぐぶつ潰したい」

「私もディアちゃんについて行くよ。管理局のしたことは許せないから」

ディアーチェの意見に賛成したのはレヴィとナハト。その目には姿に似合わない憎悪が宿っている。

「あたしは中立の立場を取らせて貰うわ。正直に言えば復讐なんて興味ないし、アンタたちが生きてれば、あたしはそれで良い」

アスカは中立の立場。彼女にとっては復讐などどうでも良かった。生きている。それ自体が奇跡であり、現状には満足しているのだ。

しかし、ここで反対意見を出したのはシュテルだった。

「私は反対です。現状で管理局と事を構えても勝ち目はないでしょ

う。それに、王の目標も達成できない」

シュテルの言葉を聞いて信じられないといった表情をするレヴィ。一方でディアーチェは納得した表情をしており、アスカやナハトは興味半分といった顔でシュテルの言葉に耳を傾けている。

「なんでさシュテルん！ボク達には大いなる闇の力がある。もう誰にも負けない、何者にも屈しない力があるんだよ！」

レヴィの反論にシュテルは全く動じず、言葉を切り返した。その表情は少しも変わっておらず、氷のように冷たい。レヴィはその表情を見て身体を身震いさせる。

「レヴィ。私たちは大いなる闇の力に生かされているだけです。闇の書の力は衰えていて、一瞬で星一つ滅ぼす力はありません」

「うつ……」

「それに、アスカとナハトは戦闘経験がなく、魔力資質も悪い、かつての守護騎士の力を継いでも、能力は確実に劣化しているでしょう」

「それは、えーと、えーと、ボクらがフォローしたり、鍛えてあげれば良いんじゃないのかな？」

「確かに鍛錬と実戦を積みれば問題は解決するかもしれませんが。しかし、時間がかかりますし、いずれ管理局に見つかります」

「そんな……！？」

惨敗だった。元より理を主とするシュテルに力を主とするレヴィで

は勝ち目がない。

がつくりとうなだれるレヴィ。この子はあと何度、この世界でうなだれるのだろうか？

「では如何にすれば良いか申してみよ」

今度はディアーチェがシュテルに意見を聞く。彼女はたとえ反対意見だろうが、身勝手な意見だろうが背負う覚悟がある。それが、王として臣下に出来る最大限の譲歩だ。

アスカやナハトがレヴィを慰めている様子を横目で見つ、シュテルはディアーチェに振り向いた。彼女は一瞬、ディアーチェを探るような眼で見えていたが、すぐに元の表情に戻ると、これからの行動の指針を淡々と述べる。

「そうですね、ディアーチェ。まず私達は生まれたばかりで魔力の貯蔵が少ない。大いなる闇の力を使って魔力を回復する手段もありますが、最後の手段として残しておくのが得策です。ここは周辺の………」

淡々と意見を述べるシュテルは最後まで喋ることが出来なかった。ディアーチェが得心といった様子で嬉々として残りの意見を喋ったからだ。

「つまり、周辺の管理局員からリンカーコアを根こそぎ奪い取り、我らの力を蓄え、管理局に遠回しに攻撃する方針なのだ！さすが、シュテルよ！理のマテリアルの名は伊達ではない！」

「どうだ？我の言うとおりであろう？」と言いながら小さい胸を張

る王様の様子にシュテルは呆れるしかなかった。

慰められて元気を取り戻したレヴィなんか「スゴいよ！さすが、ボクらの王様だ！聡明でカッコいい！シュテルんも、いろいろ考えてるんだね！」なんて、呆れるアスカとナハトの真ん中ではしゃぎ出す始末だ。

だから、そんな様子の二人に思わず、ドス黒い覇気をぶつけてしまったシュテルを誰が責められようか。

突然、ディアーチェとレヴィを襲った悪寒は凄まじいモノで、バリアジャケットの温度調節機能を無視して寒さを感じさせ、背中に氷柱を埋められたように、ディアーチェとレヴィは背筋が固まって動けなくなった。

（不味い、不味いぞ！私の頭が警鐘を告げておる……早く此处を離れなくては……）

（あわわ……アスカやディアーチェが怒った時のイヤな感覚だけど、それよりたちの悪い悪寒がするよ。早く逃げなきゃ……）

二人ともシンクロしたように固まり、逃げようとしてもバインドで身体中を締め付けられたように動けなかった。

「レヴィもお馬鹿さんでしたが、我らの王もお馬鹿さんでしたか……教育が必要ですね……」

不意に、ディアーチェの目の前で底冷えするような声が響いた。シュテルの声だ。ただ、声のトーンがおかしい。普段のシュテルとは違い、静かな声に怒気が含まれている。

(我は何か失言をしてしまったのか!? 恐ろしくて瞼も開けられん……………)

ディアーチエは自身が王であることも忘れて、ただ、ただ、震えた。恐れと不安が目の中の存在を直視することを拒み、目をつむる。一歩、一歩、ナニカが近づくとたびに彼女の心臓は大きく跳ねて、冷や汗がどつと噴き出した。

一方、レヴィは先ほどの様子と違って変わって、膝を抱え幼い子供のように震えた。

「レヴィちゃん!? しっかりして、気を強く保たなきゃダメだよ」

「OHANASHIコワイ、OHANASHIコワイ、starry night breakerイヤダ……………」

「トラウマね……………」

ナハトがレヴィを抱きしめて、安心させようと呼びかけるが、レヴィはつわごとのように同じ言葉を繰り返すだけで、反応がない。

アスカがレヴィの目を見やれば光と生気がなく、うつすらと涙を流す瞳があるだけだ。

そして、直視することも出来ないナニカがディアーチエの鼻先まで感じる距離に近づいたとき、不意に襲ってきたのは右頬に感じる鋭い痛み。思わず目を開けたディアーチエが見たモノは……………

綺麗な笑顔で右頬をつねる、語ること、記すことすらしてはならぬ

存在だった。彼女は最後にこう言い残したという。

「ああ！窓に！窓に！」

「さて、説教も無事に終わりました。続きを話しましょう」

何事も無かったかのように話すシュテルに対し、ディアーチェやレヴィは膝を抱えて座り、シュテルの言葉を真剣に聞いている。その眼は若干虚ろではあるが、生気はあるため問題ないだろう。シュテルは気にせず、言葉を続ける。

「まず、私達は二手に別れて行動します。そして、管理外世界で管理局に気づかれぬよう、魔力を収集するのが先決です」

「メンバーはどうするのシュテルちゃん」

ナハトの質問にシュテルは頷くと答えを返す。

「メンバーはサポート魔法が得意な私とナハトを分けます。レヴィとアスカはナハトとチームを組んでください。これは、接近戦が得意なレヴィがアスカの魔法を鍛えつつ、ナハトにはサポート魔法の熟練度を上げてもらう為です」

「なら、必然的に砂漠や荒野のような無人世界が適任ね。そういう場所なら管理局も滅多に近づかない。それに、初心者組と熟練者組に分けて目的に見合った行動をする訳ね。初心者組が魔法訓練なら

熟練者組は時空管理局に対する情報収集といった所かしら」

シュテルの答えに納得した様子で頷くナハト。聡明なアスカはシュテルの考えをある程度、先まで理解できたようだ。アスカの答えにシュテルは満足そうに頷くと話を続ける。

「その通りですよ、アスカ。私とディアーチェのチームは魔力を収集しつつ、管理局の末端局員から魔法で現在の時空管理局の情報を引き出します」

「以上が私の考える方針です。異議のある方は遠慮なく申してください」

シュテルの考えた方針に納得しているのか、ナハトとアスカは異議なしといった様子、レヴィはニコニコして本当に理解出来たのかは怪しいところだ。そして、説教から一言も喋らないディアーチェだが、彼女は目をつむって真剣な表情で考え事をしていた。

「ディアーチェ？」

「王様？」

シュテルやレヴィの呼び掛けにも反応をせず、微動だにしない。さすがに心配になってシュテルが精神系の治癒魔法をかけようと考えた所でディアーチェは静かに目を開けた。

「シュテルよ、お前の考えはよく分かった。その計画方針に私の願いを取り入れてくれぬだろうか」

ディアーチェは命令ではなく、お願いといった。そこに含まれた強

い想いを感じ取って、シュテルも真剣な表情でディアーチェと相對した。

「ディアーチェ。貴女の願ひとはいつたい？」

シュテルの問いにディアーチェは深呼吸を一つすると絞り出すように声を出して、願ひを口にする。

「管理局に対する復讐を實行する前に、地球へよつてほしいのだ。我は、この身に残る未練を断ち切つておきたい」

ディアーチェが語る切實の願ひ。それを聞き、他の四人は動揺を隠せなかつた。誰が好き好んで自らの殺された地に行こうと考えるだらう。まして、シュテル、アスカ、ナハトの三人はともかく、ディアーチェやレヴィにとつては嫌な思ひ出の方が多い。

シュテルはレヴィに視線を向ける。彼女は動揺しているのか瞳が揺れていた。それを隠そうと表情を変えないようにしているから、見ているシュテルの方が、心が張り裂けそうなる。

「ディアーチェ。貴女は本当に地球を訪れる氣です？ 貴女にとってあそこはもう……忌々しい場所ではないはずです。レヴィにとつても……」

シュテルの問いかけにディアーチェは動じない。しかし、レヴィの様子を見て迷いが生じ始めていた。

そんな様子のディアーチェを励ますようにレヴィが声を掛ける。

「ぼつ、ボクなら……大丈夫だから……だから、氣にしないで話を

続けて……」

その声は震えていて、無理をしているのが一目瞭然だった。ディア―チエは苦々しい表情をしながら言葉を続ける。そこには幾分かの後悔と多大な自責の念が含まれていた。

「王たる我が臣下に対する配慮も出来ぬとは、レヴィイ、すまぬな。だが、地球を訪れることは皆にとつて必要なこと。最後には嫌な思い出しがなくなるとも、シュテル、アスカ、ナハトにとつてあの地は故郷だ。未練がないわけではあるまい？」

「ディアーチエ……」

「王……アンタ……」

「ディアちゃん……わたし達のために……」

ディアーチュの地球に訪れる考えがシュテル、アスカ、ナハトの為だと知って、複雑な表情を浮かべる三人。そんな中でシュテルは思った。

（この娘はどこまでも優しすぎる。家族を思いやり、自身を犠牲にしてまで家族の幸せを願う。やはり、には復讐は似合いませ
んね）

できれば、彼女に再び優しい温もりと小さな幸せを。決して叶わぬ願いと知りつつも、そう願わずにはいられないシュテルだった。

それがディアーチェの願いですか（後書き）

文章量は後半につれて増えるでしょう。そろそろ原作に突入、戦闘シーンが入れば三倍近く増えるかも……。あと、さりげなくクトゥルフネタ入りましたが分かる人はいますかね？

シュテるんと王様、仲良いね（前書き）

お待たせしました。

今回からタイトルを大幅に変更、修正します。

GODのネタバレが含まれます、見る人は注意です。警告しときます。

シュテルんと王様、仲良いね

ディアーチエ達がこれから行動する指針を決めた後、彼女たちは二手に分かれる前に、試合に挑む選手達のように円陣を組んでいた。出発直前になってレヴィが「せっかくだから、この日、この場所でボクの宣誓をしよう」と言い出したのがきっかけだ。

おかげでディアーチエは悪い意味での王の気質が発動して、「ならば盛大に演出してやるうではないか、名も無き白銀世界よ、我らの旅立ちを祝うが良い！」なんて言う始末。無駄な事に魔力を使う王に、シュテルやアス力は盛大に呆れるしかなかった。

王の演出によって紫天の書を中心に漆黒の魔力光を放つベルカ式の魔法陣。それが回転しながら少女たちの足元を照らしている。

五人の少女たちは自らのデバイスや装備を取り出す。ディアーチエは十字杖エルシニアクロイツを。レヴィは戦斧バルニフィカス^{ベにひまる}を。シュテルは魔杖ルシフェリオンを。アス力は影打ち・紅火丸を。ナハトは漆黒のドレスグローブ・シャッテンを着けた右腕を。少女たちは円陣の中心で重ね合わせた。

少女たちは自らに語りかけるように宣言する。数百年の時を経て味わった苦しみと積み重ねられた怨念を忘れぬように、身体に再び刻みつけるように。

シュテルが静かに告げる。

「私たちは還ってきました。あの何も見えぬ虚数空間。そして、ただ、ただ、寒かった氷の檻から復讐するために……」

シユテルが隣に入るアスカに視線を向けると、アスカは頷いて言葉の続きを告げる。

「アタシ達は憎むわ。九を救うために壱を犠牲にした時空管理局を、理不尽をアタシ達に押し付けた世界を」

アスカが目の前にいる真剣な表情をしたレヴィに言葉の続きを託す。

「ボクら絶対に許さない！今まで善人面してボクらを騙し！永遠に近い奈落の底に封印したギル・グレアムを許さない！」

激しい憎悪と憤怒の表情で告げるレヴィから言葉の続きを受け取ったのはナハト。彼女は無表情だが瞳に静かな憎悪を宿していた。

「私たちの王を闇の書諸共、永遠の氷で封印したあげく、罪無き病院の人たちまで殺したクライド・ハラウン。私はお前たちを必ず殺す」

言葉に込められた憎悪はレヴィ以上なのか、普段の優しい少女の面影は無くしたナハト。

そして、最後に告げるは王たる少女。闇の書の呪いをその身に背負い、多くの人々の命を背負った彼女はもつとも力強い声で宣言する。彼女の決意が少女達の中で一番強いだろう。

「我らは必ず復讐を果たすであろう！その為に我らは果てしない時を経て還ってきたのだ！我らに大いなる闇の、いや、管理局ですら砕けず、永遠の時を経ても朽ちる事のなかった、『砕け得ぬ闇』の加護があらんことを！」

王の宣言と共に水色、金色、紫色の魔力光がどこかへ飛んでゆく。予定通り何処かの無人世界へと転移したのだ。転移の経験がもっとも多いレヴィが二人を先導しているから迷う心配も無いだろう。残されたシュテルは佇む王を黙って見つめる。ディアーチエは、消えていった魔力光を静かに見つめていたが、シュテルの視線に気が付くと儚く微笑んだ。

「王よ、迷っているのですか？」

シュテルの問いかけにディアーチエは答えを返す。

「ふふ、お前には隠し事は出来ぬな、確かに我は迷っている、いや、後悔しているのだ」

「復讐する事ですか？それとも……………」

しかし、シュテルの続く問い掛けは最後まで言えなかった。ディアーチエの右手がシュテルの口を塞いだからだ。

「ふいあーちえ！？はにを！？」

ディアーチエの突然の行動に驚き、困惑するシュテル。だが、もがき右手を振り払おうとするシュテルは、次のディアーチエの言葉で凍りついた。

「だが、迷っているのはお前も同じであろう？シュテルよ」

「しよれは！！？」

「我が気付かぬと思わなかったか？お前たちとは深い所で繋がって

いるのだ。故に我はお前たちの全てを知っている」

「つつっ！」

シュテルは咄嗟に右手を振り払うと、全力で後ろに下がる。そして、ルシフェリオンを油断なく構えた。

（まさか、私の迷いに気が付かれるとは！迂闊でした。だとすれば私の復讐に対する関心の無さにも気が付いているでしょう。些か早いです、ここで、王とは袂を分かť運命なのでしょうが？）

シュテルはマルチタスクで今後の展開を考えながら王を見つめる。ディアーチエは余裕なのか悠然と構えながら動こうとしなかった。

それどころか、肩が震えていた。まるで、笑いを抑えられぬようにシュテルは訝しげにディアーチエを見ていたが、ついに堪えきれなくなつたのかディアーチエは王の威厳を忘れ年相応に腹を抱えて笑い出した。

「ククッ、あつはははッ！あー、おかしくてたまらん。あのシュテルが動揺する顔！」

「……………はい？」

してやったり、という顔をするディアーチエの姿にシュテルは思考がオーバーフローしていた。展開していたマルチタスクの全てが同一の思考に染まり、疑問符を浮かべている。

そんなシュテルの様子に答えを出したのは他ならぬディアーチエ自

身だった。

「まだ分からぬか？お前は騙されたのよ。我はお前たちと深い所で繋がってなどおらぬ、ただ、シュテルが勝手に勘違いして自爆しただけよ。だいたい、我はお前たちのプライバシーを監視する気など無いわ！あーっはっはっはっ……………」

まだ抑えられない笑いを必死に堪えるディアーチエが語る言葉の意味。それをゆつくりと脳内で理解した瞬間、シュテルは雪上に膝を突いてうなだれた。

「私って本当にバカです……………」

何とか気を取り直したシュテルは再び王と対峙する。したり顔で腕を組んでこちらを見るディアーチエに、いつか必ずOHANASHIする事を心に刻みつけながらシュテルは脱線した話を戻した。

「この際、お互いの迷いの内容は捨て置きましょう」

「ククッ、また、先程のようになるからか？」

「今すぐOHANASHIしましょうか？」

「まてっ！我が悪かった！この通りだ！」

「よろしい」

シュテルのOHANASHI宣言にすぐさま土下座するディアーチエ。ヒエラルキーは簡単には覆らない。

シュテルが咳払いを一つして気を取り直している間に、ディアーチエもすぐさま元の体勢に戻る。

「ではディアーチエ、これからどうするか分かっていますか？」

「地球に向けて転移しながら適当に魔力を集める、そして管理局の情報を奪うのよ」

「その通りです。しかし、レヴィ達は魔力を集めるのが上手くはいかないでしょう。その分、私たちが働く事になります」

「臣下が王を働かせるなッ！と言いたい所ではあるが、臣下の尻拭いも王の務め。仕方あるまい」

「王のご足労、傷み入ります。全ての準備が整い次第、王の手を煩わせないように致します」

「期待している」

シュテルはディアーチエとのやり取りをしながら、片手間に転移魔法の準備を終わらせていた。シュテルの元になった二人の人物のおかげで、この程度の魔法操作は造作もない。

朱色のベルカ式魔法陣が足元に展開する光景の中、不意にディアーチエが思い出したように呟いた。

「そう言えば忘れておったが、シュテルよ」

「何でしょう？」

「先程、右手でお前の口を塞いだときにプログラムに細工をしておいた。寝るときは楽しみにするが良い」

「はい？それはどういう………？」

しかし、シュテルの言葉は最後まで言えなかった。転移魔法が発動したのだ。だが、最後にディアーチェが言った言葉は読唇術でなんとか分かった。

（夢の中でユーリと楽しくな？ユーリとはいったい？）

シュテルの疑問は夢を見るまで分からなかった。

シュテるんと王様、仲良いね（後書き）

何だか私の文章、安定してませんね。力不足で申し訳ないです。

今回は伏線を張り、早期に二つの伏線を回収しました。

本当ならもっと後に明かす予定でしたが、あえて早期に回収します。皆様の印象が変わりますからね。実験です。

今回はレヴィ編になると思います。マテ子たちは油断するとギャグに持っていくので扱いには細心の注意が必要です（笑）

本編開始はもう少しお待ちを、私、キングクリムゾンが出来ない体質みたいです。

誤字脱字と文章が読み辛かったら感想で報告してください。お願い致します。

うぬらは我の見えぬ所で何やってるおるか!!（前書き）

お待たせしました。

今回はディーアーチエ達で別れたレヴィ達の話になります。

しかし、釘宮キャラの使いやすさは良いですね。勝手に喋ってください。

ナハトは……ゴメンよ、彼女は戦闘シーンじゃないと活躍できないかも。

うぬらは我の見えぬ所で何やってるおるか！！

日の当たる時間は灼熱地獄と化し、月が照らす時間は極寒地獄と化す、砂漠と荒野が支配した無人世界。

そこで一匹の百足龍が地に倒れ伏した。ただし、その姿は巨大で倒れた際に大地震のような地響きを起こす程の巨体を持つ、と言えばわかるだろうか。

詳しく語れば地球の一軒家を丸呑みにする口に、無数の丸太のような脚。眼はなく、鞭のようにしなる触覚を持つ。

その巨体ゆえにアスカは龍のような百足を略して百足龍と呼んでいた。

この世界に来てから遭遇した数ある巨大生物の一種だ。

「すごいぞつ、強いぞつ、カッコいい！そう、やっぱり、ボクさいきょうー！！」

先ほど、百足龍の頭に極光斬を叩き込んでとどめを刺したレヴィ。

彼女は百足龍の頭の上ではしゃぎ、勝利のポーズをとっていた。

そのレヴィを恨めしげに睨みながらアスカは身体を縛り付けていた触手を力任せに振りほどく。その際に纏わりついた粘液やら汗やらが飛び散ったが、アスカは気にしない。

お気に入りのバリアジャケットが所々溶けて、素肌の部分を灼熱の日差しが焼いてもアスカは気にしない。

何故ならアスカは怒っているから、闇を凝縮したような瞳は細まり、竜種のような縦長の形に変化していた。身体中からは魔力がオーラのように溢れ出し、アスカの周囲が陽炎のように揺らめいている。

「はあゝ、まただよ」

傷ついたアスカに治癒魔法をかけていたナハトはアスカの隣から離れる。これから起こるであろう惨事に巻き込まれたら、ただでは済まないからだ。後の事後処理を行うためにもナハトは倒れる訳にはいかない。

小さな隔離結界を周囲に張りつつナハトは静かに距離を取る。もちろん、アスカは怪我をしているので治癒魔法の行使は止めないが…

（耳は塞いでおこう。この獣耳は聞こえすぎちゃうから……）

アスカはゆつくりと、はしゃぎ続けるレヴィの近くまで歩み寄る。そして、大きく息を吸い込むと火山が噴火する如きの怒声をあげた。

「このツ、バカレヴィいいー！！アタシを殺す気がッ！」

「うわあああー！！」

叫び声と共に放出された魔力は炎熱変換され、爆風となって砂漠の砂を吹き飛ばす。ナハトはシールドで防いだが、自分の世界ではしゃいでいたレヴィは爆風に吹き飛ばされ、百足龍から転がり落ちた。

なんとか飛行制御プログラムを起動して地面に叩きつけられる前に空に浮かぶレヴィだが、その表情は困惑している。

レヴィがアス力を見やると彼女は般若のような顔をしており、思わず身震いした。

とりあえず、レヴィはアス力の怒っている理由を聞いてみる。

「……ねえ、アスりん。どうして、その、怒ってるの？」

「誰がアスりんか！誰が！アタシは半分が優しさで出来た薬じゃないわよ！それに、アタシが怒った理由をアンタは分からのか！」

「ヒイツ！、だ、だってホントに分かんないんだもんっ……………」

レヴィの答えに、本当に理由が分かっている様子を観察したアス力は燃え上がる熱気を消した。魔力の放出を抑えたのだ。

しかし、だからと言ってアス力の怒りが収まる訳がない。レヴィが理由を理解していないなら、説明すればいい話だ。

「アタシが怒っている理由わね！？アンタがアタシを巻き込んで極光斬なんか放つからよ！」

「でも、当ててないよ？」

「ナハトが触手の拘束から助けてくれたからよ！だいたい、アタシ達の魔法の練習なのにどうしてアンタはいつも割り込んで来るのよー！」

「だって、つまないんだもん。ボクだってもっと遊びたい」

「遊ぶな！こっちは命かけてんのよ！！」

しかし、一度は収めた熱気をアスカは再び放出し始めた。ここ、数日、アスカとレヴィはこんな感じで戦闘後に口喧嘩する。どうやらアスカはレヴィと喋っていると無意識にヒートアップしてしまうらしい。

そんな様子をナハトは静かに眺める。アスカ本人は気が付いていないが彼女の怪我は治癒魔法によって全回復している。だから今は結界の維持に全力を尽くしていた。この様子ならいつものように修羅場と発展するだろう。

「本当に二人ともあきないなあ、うーん、意外とアスカもお馬鹿さんなのかな？」

無意識に毒舌を放ちながら、ナハトは結界の強度を上げた。そろそろ、アスカが本当に爆発しそうな様子を見せ始めたからだ。

「だから、アスカ~~~~！？」

「もういいっ！うるさいっうるさいっうるさいっ！！！」

アスカの怒りは頂点に達して、臨界点を越えようとしていた。何度説明しても、返ってくる答えは納得がいかず、理解してるかも怪しい様子のレヴィには我慢の限界だった。

「紅火丸！」

『承知！』

「げっ、やばい、アスりんがマジ切れした！？」

アスカが自身の刀型デバイス、紅火丸を抜き放つ。刀の柄を握る右手は青筋が立ち、彼女の心境を分かりやすく表している。レヴィはただ、怯え、逃げる体勢をとった。今のアスカに立ち向かって勝てる気がしないのだ。

「アンタなんて紅火丸のサビにしてやるッ！！」

「バルニフィカス！スプライトフォームセットアップ！」

紅蓮の炎を撒き散らしながら近づいてくるアスカにレヴィは本気で逃げた。スプライトフォームを起動して閉じられた空間を必死に逃げ惑う。

一方、アスカは周囲の被害を気にせずにレヴィを追いかける。あまりのスピード差でも彼女はレヴィがバテて疲れ果てるまで追いかけるつもりだ。

もつとも、彼女も全力を出しているため同じようにバテるのだが、アスカは微塵も気が付いていない。ある意味、ナハトが思った通り本当にお馬鹿さんなのかもしれない。

「待ちなさい！レヴィッ！！今日こそ叩き斬ってやるんだから！」

「うわああ！来ないでアスカ！辺りが火の海に！」

「誰が貧乳かああー！！」

「そんなこと言っていないよー！！」

水色の線がほとぼしり、紅い炎が駆け抜ける空の光景を見ながらナハトはのんびり眺めていた。

「今日も平和だなあ」

ナハトは初めてこの世界に来た時の光景を思い出す。あの時は本当に驚いたものだ。色々とありすぎて困った1日だった。

転移を終えたレヴィたちは、まず、余りの暑さに目眩がした。

「あつい！ここは地獄なのか、ボクらは間違って地獄に転移したのか！？」

「そんなわけあるか！」

「ううう、バテちゃうよ……」

辺り一面が砂漠の世界で、彼女たちはバリアジャケットの温度調節機能を使い。体感温度を常温に保つ。この時程、三人の少女たちはバリアジャケットに感謝したことはなかった。

「それじゃあ、私たちの目的を果たそうか」

ナハトの言葉に首を傾げたのはレヴィ。端から見れば可愛らしい様子だが、アスカはレヴィの様子に気が付いて呆れるしかなかった。

「目的って何だっけ？」

「アンタねえ、アタシ達はこのクソ熱い砂漠で訓練しに来たんでしようが、覚えてなさいよ」

「そうだ！忘れてた！」

「忘れんな！」

「この先、大丈夫かなあ……………」

レヴィの天然ボケに突っ込むアスカ。自分たちの教師役になるレヴィのアホっぷりにナハトは不安になるしかなかった。

うぬらは我の見えぬ所で何やってるおるか!! (後書き)

本当はこの文章量の三倍書いて投稿する予定でしたが一端切ります。

次回が説明会になりそうですし、話の間に長文説明や解説いれたら飽きて、途中で読み止める人がいるかもしれません。

このペースだと原作(地球に着く)まで残り6〜7話くらいでしょうか。

それでは誤字脱字の報告、感想などをお待ちしております。

レヴィ先生のパーフェクト魔法講義だぞ（前書き）

お待たせしました。

今回はレヴィによる魔法の説明回になります。なお、魔法の設定はWIKIを元に考えた作者の独自設定になります。そこはご了承ください。

レヴィ先生のパーフェクト魔法講義だぞ

この世界に来てから数時間後、レヴィ達は拠点となる場所を荒野の洞窟内に構築していた。もともと、拠点といっても洞窟内に結界魔法を展開しただけの寝泊まりする場所ではないが、何も無いよりマシである。

そこで、アスカとナハトはレヴィから魔法の講義を受けていた。

「まず、キミたち二人は魔法の体系は知ってる？」

「そんなの簡単じゃないベルカ式と……」

「ミッドチルダ式だよね」

「うん！正解だよ」

二人の答えに満足そうに頷くレヴィ。これは、魔法を知る者なら知っていて当然の知識。知らなかったら恥をかくレベルの常識だ。しかし、魔法に触れたばかりの二人は知らない事も多いため確認の為に簡単な事から始めていく。何事も基礎は大事である。

「じゃあミッドチルダ式とベルカ式の違いは何でしょう？」

簡単な問題から、少し難しい問題にレベルをあげて質問する。今回は少々間違いやすい問題だ。

「えっと、ベルカ式が近接戦闘を重視した魔法体系だったかな？」

レヴィの質問に答えたのはアスカ。だが、声音には自信がなく、やや疑問系だった。

アスカがレヴィの顔を見やれば、右手で顔を覆っている。その様子からアスカは自分の答えが間違ってたのだと気が付いて、顔が羞恥で赤くなった。

「アスカの答えは正しくもあるけど、間違ってもいる」

「どういう事？」

レヴィの天の邪鬼のような答えに、アスカの頭は混乱しつつも答えを聞く。レヴィは一つ頷くとベルカ式の特徴を二人に教えてくれた。

「ベルカ式の魔法を一言で言い表すのなら圧縮魔法なんだ」

「圧縮魔法？」

「そう。魔力をデバイスに圧縮させて相手に一撃必殺の攻撃を叩き込む。ベルカ式が近接戦闘を得意としているのは魔力の圧縮を持続させやすいから、遠距離戦闘だと、どうしても圧縮した魔力は減衰するからね。ただ、特殊な加工を施した矢に圧縮した魔力を溜めて放つとか、工夫次第で遠距離戦も可能だよ」

「なるほど、だからベルカ式魔法は、より魔力を圧縮する為に、力ートリッジシステムを生み出したのね」

「その通り。ついでにアームデバイスの強度が高いのは、近接戦闘の消耗対策と多くの魔力を圧縮しても壊れないようにするため。これがベルカ式の特徴さ」

「魔力圧縮……か、難しいの？」

「難しいよ？ベルカ式が衰退した最大の原因が魔力圧縮の難しさにあるから、ヘタな人がやると魔力を抑えきれなくて暴発とかするし」

「成る程……」

レヴィの講義に納得した様子で頷くアスカ。彼女は両腕を組むと考え事を始めた。今、彼女の頭の中では無数の魔法プログラムが構築されているのだろう。

アスカが自分の世界に没入した様子を見て、レヴィは肩をすくめると、ナハトの方を見た。彼女は微笑みながら、真剣に話を聞いているのだろう。顔は笑っているが目は笑っていない。

レヴィはナハトの様子に気圧されながらも、次の質問をした。

「そつ、それじゃあナハトはミッドチルダ式の特徴がわかるかな？」

レヴィは若干、声が震えながらもナハトに問いかけると、彼女は威圧感を和らげながら答えた。

「えっと、あらゆる種類の魔法を備えた汎用性の高い魔法体系だね」

「うん、正解だ」

ナハトの答えに満足げに頷くとレヴィは再び、アスカを見た。彼女

はまだ自分の世界に没入しており還ってくる様子はない。

仕方なくレヴィは注意する事にした。魔法の構築も大事だが、今から話す事も大事な事だ。きちんと、聞いてほしかった。

「アスカ、アスカ！ちゃんと話を聞いてる！？」

「えっ！？ああ、ごめんなさい、何の話？」

「もう、今からミッドチルダ式魔法の特徴を話すから、ちゃんと聞かないとボク怒るよ？」

「ごめん……………」

（驚いた。あのアスカが素直に謝るなんてビックリだよ）

珍しく素直に謝るアスカにレヴィは内心で驚きながら、咳払いひとつすると話を続ける。

「じゃあ説明するね、ミッドチルダ式の魔法は一言で言えば放出魔法と言えるね」

「放出魔法？」

ナハトの疑問にレヴィは頷くとミッドチルダ式魔法について詳しく解説する。

「うん、放出魔法。ミッドチルダ式魔法が射撃主体の理由だよ。ベルカ式の魔力圧縮と違って魔力を放出するなら簡単さ。魔法を使える程のリンカーコアを持つ人なら誰だって出来る。電刃衝！」

叫ぶと同時にレヴィはデバイスなしで魔法を発動させる。雷撃を纏った射撃魔法はレヴィの隣にある大岩を綺麗に両断した。

「とつ、こんな風にデバイスなしでも簡単に射撃魔法が使える……、あれ？みんなどうしたの？」

解説を続けようとしたレヴィは二人を見て戸惑った。二人とも呆けた様子で切断された大岩を見ていたからだ。

「レヴィちゃん凄い……」

「熟練者になると魔法も桁違いなのね……」

「おーい？二人とも？ん、いきなり魔法を発動したから驚いたのかな？」

二人の言葉は自分を褒めていることに気が付かないレヴィ。結局、三人とも数分ほど固まったまま時間が過ぎた。

数分後、三人は気を取り直して講義に戻る。先ほどの数分が良い休憩時間になったのか、講義を受ける二人は集中力があがっていた。

「さて、ミッドチルダ式がなぜ汎用性に優れているか説明するよ。さつき説明した魔力放出を応用して、ある運用方法が考案されたからなんだ」

「ある運用方法？」

ナハトの疑問にレヴィは頷くとバルニフィカスからプログラムデータを公開する。空間に表示された文字列はパソコンのプログラムに似ていた。

「あらかじめデバイスにプログラムを保存しておいて、使う時にプログラムに対して魔力を放出する使い方。こうする事で様々な効果を持った魔法が発動するようになった」

「あれ？でもベルカ式でも同じ方法を使っているよね」

「うん、でも最初に発見したミッドチルダ式と違ってベルカ式は後から発見されたから、優れた使い手でもないかぎり補助魔法は数段劣るでしょ？それに、魔力圧縮と魔力放出は正反対の技術だからベルカ式は使い分けるのが難しかったんだ」

「そうなんだ」

「とにかく、この方法によってミッドチルダ式は多種多様な種類の魔法を使えるようになった。射撃、砲撃、収束、バインド、転移、幻術、ブースト魔法といった種類の魔法だよ」

レヴィは続ける。

「そして、ミッドチルダ式魔法に合わせて、デバイスも処理能力と記憶容量拡大の方向性に進化した。それがストレージデバイスやインテリジェントデバイスさ。話はこれくらいにして、少し休憩しようか。ボク疲れちゃったよ」

そう言うとレヴィは大きく伸びをして息をついた。ここまでしゃべ

り続けたし、何より同じ姿勢は疲れが溜まるのだ。

アスカやナハトも立ち上がって身体をほぐしていた

「少し長時間の休憩をとったあと二人の魔法を考えてみようか。そして今日は休んで明日、模擬戦ね」

「ホントに！レヴィちゃん！！」

「ほっ、本当だよ？」

レヴィの言葉にナハトは目を輝かせてレヴィを見た。突然のナハトの行動に驚きつつもレヴィは頷く。

その様子を見てアスカは苦笑するしかなかった。ナハトは生前、姉を手伝う為に機械工学を学んでいた。その関係で魔法のプログラムに興味があるのだろう。

（しかし、今日のレヴィはやけに頭が良くて、じょう舌だったわね。どうして普段はアホの子なのかしら？）

ふと、今日のレヴィの様子に疑問に思ったアスカは、気になって本人に聞いてみることにした。

「ねえ、レヴィ」

「なあに、アスカ？」

「今日はやけに博識だったじゃない？どうして普段からそうしないの」

「むう、なんだか馬鹿にされた気がする」

アスカの言葉に可愛らしく頬を膨らませて不機嫌になるレヴィ。そんな様子のレヴィにアスカは苦笑した。

「ごめん、ごめん。でもあの知識をどこで覚えたのかは気になるじゃない」

「ああ、それはねアスカ」

「それは？」

アスカは今日の講義で頭の良いレヴィを尊敬していた。しかし、アスカの幻想は次のレヴィの一言で打ち碎かれる。

「全部、紫天の書の受け売りだよ。あんな難しい話ボクが知ってるわけじゃないか」

レヴィの答えを聞いたアスカはその瞬間、レヴィに対する尊敬を失い、変わりに沸き上がるのは羞恥とレヴィに対する理不尽な怒りだ。

「アンタは……アンタは……！」

「ん？どうしたのアスカ？」

「アタシの感動を返せ！少しでもアンタを尊敬したアタシがバカみたいじゃない！」

「なんで……!!」

魔力で生成されたハリセンを右手にレヴィを追いかけて回すアスカ。レヴィは涙目になりながら洞窟内を逃げ回った。その様子を見ながらナハトはこう呟く。

「やっぱりレヴィちゃんはアホの子だね。正直に言わなければあんな目にあわないのに」

「こらゝゝ！おとなしく捕まりなさい！そして逃げるなっ！」

「ボクが何をしたって言うのさああゝゝゝ」

「でも、素直で正直な所がレヴィちゃんの良さだよ」

それから二人の追いかけてこは魔法プログラムの構築をやりたいナハトによって止められるまで続いた。

レヴィ先生のパーフェクト魔法講義だぞ（後書き）

レヴィはやっぱりアホの子でした。

次回でレヴィ編は最後になります。

誤字脱字がありましたら報告の方をお願い致します。

レヴィ、アンタって意外とスパルタね……………（前書き）

お待たせしました。

本当はもう少し長いのですが本来の三分の二くらいで投稿します。
長すぎると読む気失せるかもしれませんので。

前回、レヴィ編が最後と言った言葉が嘘に……………、お詫びに作者は焼き土下座いたします。ぐおおおお……………！

レヴィ、アンタって意外とスパルタね……

灼熱と極寒の二つの顔を持つ無人世界にてマテリアルの三人は砂漠の地を訪れていた。この世界の時間も1日の半分を過ぎており、残りの時間を彼女たちは実戦訓練に使う予定だ。

「さて、アスカ？準備はできてる？まずはデバイスの機能を一通り使ってみてよ。ただし、カートリッジシステムは後回しで、制御に失敗すると大変な事になるからね」

「わかったわ。紅火丸？準備はいいかしら」

『無問題』

アスカの問いかけに対して、静かに答える紅火丸。アームドデバイスの為か口数は少ないがアスカを一生懸命サポートしていた。

「紅火丸！戦闘形態に移行よ！」

『承知！』

戦闘形態に移行。その言葉を叫んだ瞬間にアスカのバリアジャケットに変化が訪れる。両腕に深紅のラインが入った漆黒の籠手が生成され、アスカに装着された。ふくらはぎまで長かったチャイナドレスの裾は太ももの半分まで短くなり、両足にも深紅のラインが入った漆黒のすねあてが装着される。

背中はいくつも見せびらかすように開けられているが、日焼けしないようバリアジャケットの透明な薄い膜が張られた。主の可愛らしさを損なわれないように紅火丸が配慮したのだ。

「ほえ、アスカ、カッコいいねえ、変身なんてボク憧れちゃう。よし、決めた！ボクも新しい形態^{フォーム}を考えちゃうぞぉ〜」

「アンタって、本当に子供よね」

（それは私達も同じだよアスカちゃん）

アスカの変身を目の当たりにしたレヴィが両手を組んで目をキラキラさせていた。その様子を見て苦笑しながらアスカは次の行動に移る準備をする。

一方、二人から離れて様子を見ていたナハトはアスカの言葉に呆れた。アスカは自分がまだまだ子供だという事を忘れていないだろうか。そう思うと、思わず小さなため息を吐く。

（今度はアスカちゃんが子供に戻るようなイタズラをしようかな？普段からアスカちゃん、みんなに気を使っているし、偶にはストレス発散させてあげないと……）

ナハトが微笑む表情の裏で様々な思考をしている間、アスカは紅火丸を正眼に構える。そして、カートリッジをロードした。

「カートリッジロード！」

「えっ！！アスカ！ちょっと待った！！」

レヴィはアスカの突然の行動に驚く。はしゃいでいたせいで気が付く事に遅れ、咄嗟に制止の声を上げるが、既に遅かった。

「えっ？なにっ……！？コレ……身体から……魔力が……溢れて、苦しい……」

カートリッジをロードした瞬間にアスカの体内で魔力が暴れ出す。アスカは必死に魔力を制御しようとするが、次の瞬間、苦悶の声と共にアスカは倒れてしまう。

「アスカちゃん！」

「アスカ！？しっかり！気を強く保って魔力を少しでも放出するんだー！」

「うう……、ゴメン……かなりキツイ……」

「ああもうッ！ナハト！すぐにアスカの魔力を外部から吸収、放出させるよー！」

「うん！まかせてレヴィちゃん！」

すぐに駆けつけたレヴィとナハトがアスカの体内から魔力を放出させていく。苦しそうな顔をしていたアスカだが徐々に顔色が良くなっていく。

それから二人の応急処置はしばらく続いた。

「もう！自分の力量くらい把握してよ！いくら魔法の初心者だから

って、ボクらは激戦に身を投じるんだからね！しっかりしてよ！」

「ごめんなさい……………」

あの後、体調が回復したアスカはすぐさまレヴィに正座させられ、説教されていた。普段のアホっぷりからは想像も付かない真面目なレヴィの様子に、アスカは反論もせず、ただ大人しくするしかなかった。

「えっと…………、レヴィちゃん。アスカちゃんも反省してるみたいだし、もう、許してあげよう？」

「ナハトは黙ってて！ボクは今アスカと話してるんだ！！」

「うう…………、ごめんね、レヴィちゃん……………」

見かねたナハトがレヴィをなだめようとするが、普段の様子からは想像もできない剣幕に圧倒されて、弱々しく引き下がる。

レヴィの説教は続く。

「だいたいアスカは自分がどれだけ危険な事をしたか理解してる！？下手したら行き場を失った魔力が暴発して大怪我がじゃ済まなかったんだ！！」

「それは！私だって……………」

「言い訳するなッ！！！！」

「ッ！！！！……………」

アスカの言い訳にもレヴィは聞く耳を持たない。アスカがレヴィの目を見ると、レヴィはうつすらと目尻に涙を浮かべながら真剣な表情でアスカを睨んでいた。

「もし、アスカが大怪我したら！！大怪我したら……ボクじゃ……治してあげられないんだよ………そしたら、ボク……ボク………どうしたらいいのさあ……うわ………ん！！」

やがて、何度も怒鳴ろうとするレヴィだったが、アスカが大怪我した場合を想像してしまい、うつすらと目尻に溜まっていた涙を滝のように流して叫ぶ。

「レヴィ………あんた………」

普段の元気で子供っぽいレヴィからは想像もつかない様子にあスカは絶句していたが、ゆつくりと立ち上がるとレヴィの事を抱きしめた。そして、幼い子供をあやすように背中をさする。

気が付けばアスカは自分のした無謀さを後悔して静かに涙を流していた。

「うわ………ん！！アスカのバカ！バカ！バカ………！どうして無茶するんだよ………」

「ごめんっ………！ホントに、ごめんね………」

強く輝く日照りが世界を照らす中でふたりの少女が夜の守護者に見守られながら涙を流していた。

「さてっ、気を取り直して訓練再開といこうじゃないか。アスカも反省したみたいだしね？」

「返す言葉もないわよ……………」

アスカがカートリッジシステムを使って自滅した事件からマテリアの二人はアスカが回復するまで自主訓練をしていた。

今はこうして訓練を再開する為、前回と同じようにレヴィとアスカは互いに対峙している。

ナハトは二人を離れた場所で見守っていた。前回と違うのは何らかの魔法を使っている事。足元に紫色のベルカ式魔法陣が回転している。しかし、アスカにはそれが何をしているのか理解出来なかった。

「さて、今からアスカにもう一度カートリッジシステムを使ってもらうよ？」

「えっ！？ムリよ！だってアタシはさっきカートリッジシステムを使ってコントロールに失敗してるのに……………」

レヴィの言葉に驚くアスカ。大怪我する寸前まで魔力が暴走した経験がトラウマになったのか、いつもの勝ち気な性格からは信じられない程に弱音を吐いた。

そんな様子のアスカを安心させるようにレヴィは子供らしく微笑むとナハトを指差す。

「大丈夫。アスカが休んでる間にナハトが魔力制御を一生懸命、練習したから。制御できない分の魔力はナハトが調整してくれる。アスカは自分で魔力を制御できるようになるまでナハトの力を借りれば良いんだよ」

「でも……………」

それでも弱々しい態度のアスカにレヴィは肩をすくめる。しかし、次の瞬間バルニフィカスを取り出すとカートリッジをロードした。

「レヴィ……………アンタ何を……………」

突然、デバイスを取り出してカートリッジをロードしたレヴィの様子に驚くアスカ。

しかし、レヴィはアスカの質問には答えなかった。代わりに口から出たのはアスカを励ます言葉だ。

「しっかりしろ！アスカ・フランメフォーゲル！！強くなりたいんだろ！だからさっきはボクの忠告をムシしてカートリッジシステムを使ったんだ！魔力圧縮の技術を覚えるために！」

「アンタ……………どうして気が付いたのよ……………」

「ボクだって強くなりたいからさ！『力のマテリアル』は何時だっ てみんなを護るために強くならなきゃいけないんだ！！」

それに、とレヴィは言葉を続けた。些末で小さな出来事に自信を無くした友を勇気づける為なら、レヴィは今なら何だって出来る気がした。

「ボクと同じように生まれたアスカにカートリッジシステムごとき使えない訳がない！今のアスカは臆病でカートリッジシステムすら使えないバカだ！やゝい、バゝカ！バゝカ！カートリッジシステム使えないからボクよりバゝカ！！」

「な・ん・で・すつて！？もう一度！言つてごらんなさいよ！」

「カートリッジシステムすら使えないアスカはボクよりバカですよゝゝ！！」

「なによ！バカって言った方がバカなのよ！！もうキレたわ！カートリッジロード！」

「ッ！制御システム起動！魔力コントロール開始！！」

レヴィにバカにされ、さんざん挑発されたアスカは無意識にカートリッジシステムを使用する。いきなりカートリッジシステムを使われた為、ナハトの補助が遅れたが、問題なく増幅された魔力をコントロール出来ていた。

制御された魔力は炎熱変換され炎となってアスカの背中から放出される。その姿はさながら炎の翼をはやした墮天使ようにレヴィの目に映った。

一方、アスカはナハトの補助を受けてとはいえ、カートリッジの魔力をコントロール出来たことに驚いていた。思わず口を開けて呆け

てしまう程の様子で驚いている。

「うそ……、アタシ、魔力をコントロール出来てる……？」

「良かったねアスカちゃん。やっぱり、アスカちゃんは凄いよ」

「ふふん！だからボクは言っただろう？アスカはやればできる子だって。それにアスカの翼、とってもキレイだね！天使みたいだ！」

アスカが驚いて戸惑いを見せるなかで、レヴィとナハトは自分の事のように喜んでいた。二人は素直に嬉しかった。仲間の挫折と迷いに力になったことに、だから、仲間の成長を自分の事のように喜んだ。

「アンタたち……、迷惑かけてごめん！そして、助けてくれてありがとう！」

そして、アスカは助けてくれた仲間達に心の底から感謝した。力を得て間もない自分を助ける為に本気で色々と考えてくれた仲間たちに素直にお礼を言いたかった。だから、お礼を言った時のアスカの笑顔は、炎の翼に負けないくらい明るい笑顔だった。

だが、感動の雰囲気をぶち壊し、アスカにとって地獄のスパルタ訓練が始まるのはここからだった。アスカは後にこう語る。

「あの時ほどアタシが何も考えず、ただ、がむしゃらに戦った時は

なかったわね、

きっかけはレヴィの一言から始まる。

「ねえ、ナハト」

「なあに？レヴィちゃん」

アスカの増幅された魔力をコントロールしていたナハトは、あまり集中力を乱さずにレヴィの言葉に耳を傾けた。

「ボクらがシュテるんに言われた事は魔法訓練と魔力の収集だよね？」

「うん、そうだよ」

「だからボク、いっしょうけんめい考えたんだ。訓練できて魔力も収集できる方法」

「えっ！？」

レヴィの言葉にナハトは珍しく驚き、困惑した。レヴィの考える訓練もできて、魔力も収集する方法とは何なのか、マルチタスクを展開して考える。その間もアスカの補助が途絶えないのは流石としか言いようがない。

（模擬戦じゃないよね、模擬戦は訓練できても魔力を収集できない。私たちが魔力を収集しても意味ないもの。なら訓練できて魔力も収集できる方法は……まさか！）

「レヴィちゃん、まっ！」

「天破！雷神槌！」

ナハトがレヴィの考えについて思い立った時、咄嗟にレヴィを止めようと声を上げたナハトだが一步遅かった。

足元に通常より大きなミッドチルダ式魔法陣を展開したレヴィが魔法を発動させたのだ。タメ無しで高位魔法を発動させるレヴィの資質は素晴らしいが、今はそれが仇となった。

水色の輝きを放つ剣が天から砂漠の大地に降り注ぎ、次の瞬間には水色の雷が閃光と轟音を放ちながら砂漠に降り注ぐ。砂漠の大地が魔法に付与された爆砕効果で抉り取られ、砂塵が巻き上がった。

「あああああ。何てことを」

「レヴィ、アンタ何やってるのよ？」

「うん？説明してなかった？これはねアスカ、この世界にいる原生生物を起こしたの」

「はあ？原生生物を起こしたって？」

ナハトがレヴィの起こした惨事に頭を抱え嘆き。アスカはいきなり発動された魔法の意図が分からず、レヴィに質問した。

レヴィは悪びれた様子もなく無邪気な笑顔を浮かべながらアスカに嬉々として説明する。

アスカはレヴィの言っている意味が分からなかったが、いきなり響

き渡ったおぞましい獣の叫びによって理解することになった。

‘ K I S Y a a a a ! ! ! ! ’

「きゃうッ！」

「何よ！これえー！」

「来たよ！来たよ！強そうなヤツが来たよ！」

重い金属を擦り合わせたような甲高い叫びに、耳が良すぎるナハトは獣耳を両手で塞ぎ、アスカは身を竦ませた。唯一、レヴィだけはバンザイしながら空中で喜んでいる。

そして、不意にレヴィ達の砂漠の周囲が盛り上がり始め、アスカとナハトは身の危険を感じて空中に退避した。すると、現れたのはおとぎ話に登場する龍のような体躯を持つ百足だ。

「何アレ………？」

思わずアスカがうなだれ指を差すのも無理はない。かつて、アスカ達が住んでいた世界の高層ビルに巻きついて、余裕がありそうな体躯を誇る百足龍、そんなモノを初めて見れば驚くのも無理はない。むしろ絶叫して気絶しないだけマシであろう。

アスカの疑問に答えたのはやはりレヴィ。彼女は驚き言葉を失ったアスカとナハトに言う。

「今から皆でアレを狩るの。リンカーコアが小さいから収集できる魔力も少ないけど、良い訓練相手になるよ！」

満面の笑顔を浮かべて語るレヴィに呆れた表情を浮かべるナハト。アスカは口を開けてポカンとした表情を浮かべていたが、状況を理解すると力いっぱい叫んだ。

「ふざけるな――！！！」

「ひゃん！？」

「魔法を知って間もない私たちに巨大生物と戦えですって！冗談じゃないわよ！スパルタにも程があるわ！！」

怒り狂い、レヴィに向けて怒声をあげるアスカ。余りの剣幕にレヴィは身を竦めるしかない。

一方、餌が少ない世界でエネルギー消費を抑えるために寝ていた百足龍は、安眠を邪魔した敵対者を見定めると鎌首をもたげて口から砂の塊を標的に向けて吐き出した。

「ッ！危ない！！」

咄嗟に反応したナハトが喧嘩する二人を引っ張って飛ぶ、標的を失った砂の塊は砂漠に着弾すると爆音と共に砂地を溶かして沈んだ。

「あつ、危なかった〜！」

「助かったわナハト……………」

「もう……、二人とも油断するからだよ」

キィキィと金属音を鳴らしながら三人を威嚇する百足龍。それを見

据えながら三人は高度を上げて距離を取る。

「やい！ムカデ！ボクらが名乗りをあげる前に攻撃するなんて卑怯だぞ！」

「アンタが怒らせたせいでしょうがッ！だいたい！戦いに卑怯もクソもあるか！」

「二人ともいい加減にしようよ〜」

アホな事を言うレヴィに相変わらずツツコミを入れるアスカ。先ほど命の危険にあったのに変わらない様子の二人にナハトは呆れて困惑するしかない。

「とにかく、今はアイツを狩る！先手はボクが行くから二人は援護して！」

「ちょっと待ちなさい！」

「二人とも私の話を聞いてよ〜〜！？」

レヴィはそう言うと言まじいスピードで百足龍に突っ込んで行く。戦闘になるとレヴィは周りが見えなくなるのかアスカの言葉は届いてなかったようだ。ナハトは……話を聞かない二人に少し涙を流していた。

「いくぞムカデ！食らえ！光翼斬！」

急降下する勢いのまま、バルニフィカスから魔力刃を飛ばすレヴィ。

（狙いは百足龍の触覚だ。地中で過ごす百足龍は音や空気の振動を

たよりに獲物を探しているはず。ソレを感じ取る触覚さえ斬り落とせば狙いを定める事さえ出来なくなる)

瞬時に相手の弱点を見抜き、弱点を攻めるレヴィの動きは、もはや雷光そのものだ。余りの速さに百足龍は反応すらできず、片方の触覚を光翼斬によって易々と切り落とされた。

「SYAAAAA!？」

いきなり片方の触覚を切り落とされた百足龍は苦悶の叫びを上げる。ただ、黙って殺されまいと身体中から触手を伸ばしレヴィを捕らえようとした。「クツ、数が多い!でも、ボクを捕らえることは出来はしない!」

レヴィの進路を塞ぐように展開される触手。レヴィがバルニフィカスから展開される極光斬で切り裂いても、それを上回る数の触手が四方八方からレヴィに迫った。

(マズい、このままじゃ捕まる!)

その時、焦るレヴィのピンチを救ったのは上から飛来した極炎弾だ。巨大な炎の塊は百足龍の顔に着弾すると爆発して百足龍の巨体を仰け反らせる。

レヴィが上を見やればアスカが黄金のミッドチルダ式魔法陣を展開しながら紅火丸の切っ先を百足龍に向けていた。

「今よ!レヴィ!これでさっきの借りは返したからねー!」

「サンキュー!アスカ!ムカデ!お前の触覚は全てもらい受ける!」

アスカの叫びに答えながらレヴィは、傍目から見て水色の光がほとばしった様にしか見えない速さで百足龍の最後の触覚をすれ違いに切り落とす。

「決まった。やっぱりボクって、最高にカッコいい！」

極光斬を展開したバルニフィカスを振り抜いたポーズのまま、決め台詞を呟いたレヴィ。そんな彼女を尻目にすれ違った存在がいた。ナハトだ。

彼女は戦闘形態に移行しているのかバリアジャケットのイブニングドレスは裾が膝まで短くなり、普段は隠した獣耳と尻尾が飛び出していた。そして、ドレスグローブの上からナックルグローブが両腕に装着されている。

「トドメは私が貰うよレヴィちゃん」

「あー！ズルい、ズルい、ズルいよナハト！」

レヴィが駄々をこねて叫ぶなか、ナハトは左右の触覚を失い混乱している百足龍の頭に取り付いた。

「痛い思いをさせてゴメンね百足さん。だけど、すぐに終わらせてあげるから………うああああ！」

ナハトは叫ぶと同時に百足龍の頭に向けて拳を振り下ろす。

ドゴォ！という轟音と共に打たれた拳は百足龍の堅い甲殻にひびをいれ、ナハトの拳に秘められた威力の凄まじさを表していた。頭を

ぐらつかせる百足龍からナハトは急速に飛び離れると、百足龍は地響きと共に地にひれ伏したのだった。

「凄いじゃない！ナハト！拳だけでアイツを倒しちゃうなんて！」

「ボクの獲物を横取りされたのは気に入らないけど、カッコ良かったよナハト！」

「ありがとう。二人とも」

ナハトに近づき、口々に賞賛の言葉を贈るレヴィとアスカ。ナハトはお礼の言葉を言っていると、空中で優雅にお辞儀をした。

思わず見惚れる二人だが、次にナハトが語った言葉に絶句することになる。

「でも、気絶させる程度に加減するのは、少し骨が折れたかな」

「気絶させる程度に……………」

「加減だつてえ……………」

「うん、本気を出したらあの子の身体、砕いちゃうから」

微笑みながら語るナハトに絶句する二人。アスカの極炎弾は百足龍を仰け反らせるに止まり、レヴィですら切り裂く時に甲殻の隙間を狙ったのに、ナハトは拳だけで百足龍の身体を砕けるらしい。思わず身震いするレヴィとアスカ。

「ん？どうしたの二人とも？身体が震えてるよ？」

「何でもない……………」

「？」

そんな二人の様子を不思議そうに首を傾げて見つめるナハトだった。

「さて、コイツの魔力を収集するぞ……」

バインドで百足龍の身体中を三人掛かりで縛り付けた後、レヴィは王に渡されていた疑似紫天の書を取り出す。

「レヴィちゃん。殺さないでね？可哀想だよ……………」

「え……なんで……？」

いざ、収集しようとした瞬間、ナハトに殺すなと哀願され、不満顔を浮かべるレヴィ。殺すまで収集した方が効率が良いし、何より加減するのは手間が掛かる。ハッキリ言っただけでナハトの言っている事は、身勝手な自己満足だった。

「レヴィちゃん？」

「ハイ、ワカリマシタ。殺サナイヨウ加減シマス」

しかし、ナハトの素敵な笑顔によってレヴィは頷くしかなかった。

先ほどの百足龍を拳一つで沈めた光景はレヴィにOHANASHI
と同等のトラウマを植え付けているようだ。

「奪え！偽天の書！」

‘SYA A a a ……」

偽天の書から伸びた光が百足龍の心臓部に食い込み、魔力を奪って
いく。百足龍が苦しそうな叫びをあげ、暴れ出すがバインドが絡み
ついて動けなかった。

「まるで、ボクらが悪者みたいだ……そりゃ、そうだね。ボくら
最低な事してるんだもん………」

「ごめんね…百足さん………」

「ナハト、レヴィ、アンタ達………」

苦しそうな様子の百足龍を見て悲痛な顔を浮かべるナハトとレヴィ。
その様子をアス力は黙って見ているしかなかった。

（本当に復讐が正しいのか、考え直す必要があるわね）

「だって、アンタたち、命を奪うことに苦しそうな顔をしてるじゃ
ない………」

不意に呟いたアスカの声は誰の耳にも届かず、百足龍の叫びによっ
てかき消された。

レヴィ、アンタって意外とスパルタね……………（後書き）

というわけで、レヴィ編はもう少し続きます。

ディアーチエとシュテルの活躍はもう少し待ってください。

誤字脱字報告や感想をお待ちしております。

膝が焼き付いて痛い（泣）

私はアルフじゃないよ、レヴィちゃん（前書き）

最速更新。気合いと根性で頑張りました！

とりあえず警告します。

GODのネタバレが含まれた事に。

私はアルフじゃないよ、レヴィちゃん

灼熱と極寒の二つの顔を持つ世界は今、夜が訪れていた。美しい月や星が輝くなかで、砂漠と荒野の大地は生物の熱と体力を 瞬時に奪う恐ろしい極寒地獄と化している。

マテリアルの三人娘も流石に砂嵐の発生した真冬のような砂漠では訓練できず、一旦、荒野の洞窟内に作っておいた拠点に避難していた。

今はアスカが結界に炎熱変換された魔力を流し込み、ナハトが流された魔力を制御することで洞窟内に即席のエアコンを作り、三人で暖を取っていた。

「こんな時はアスカちゃんの魔法って便利だね。火は応用できる事がたくさんあるもの」

少しでも皆で暖を取ろうと牙狼形態に変身していたナハトが呟く。もともと、彼女のモフモフした毛皮は現在レヴィに独占されていたが。

「それを言うならアンタの結界や拘束魔法だって応用が効くじゃない。ようは、発想とその場に適した魔法の使い方次第よ」

ナハトの呟きに答えたアスカは反対側の平らにした岩で寝そべりながら不満顔でレヴィを見ていた。

生前、犬好きだったアスカがモフモフに興味を示さない訳がない。

しかし、柔らかくて暖かいモフモフは瞬時にレヴィによって占領されてしまい、仕方なく義姉として我慢していた。

（いつか、あのモフモフをアタシも独占してやるんだから！）

心の中で強い決意を抱きながら、

アスカは身体を起こした。やはり、硬い岩の上で寝るのは辛かったらしく背中をさすっている。

生前がお嬢様だっただけに、こういった野宿は慣れていなかったのだ。

そんな、アスカの様子を見て、何度目になるか分からない提案をナハトはアスカに言う。

「やっぱりアスカちゃんも反対側においでよ。気持ち良くて暖かいよ？」

ナハトの提案と共に獣耳は嬉しそうにピョコピョコ動き、尻尾は誘惑するようにパタパタと上下した。

「いぬみみ……しっぽ……モフモフ……ハッ！」

するとナニカに魅了されたように両腕をゾンビのように上げ、瞳はトロンと揺れ、口を惚けたように開けながらナハトに近寄るアスカしかし、半分ほど近寄った所で正気に戻り、元の場所に戻った。

首を左右に強く振り、気合いを入れ直すアスカの様子にナハトは苦笑するしかなかった。

（さつきから、さり気なくチャームアイで魅力してるんだけど、アスカちゃん、凄い精神力だね。すぐに正気に戻っちゃうんだもん。そんなにレヴィちゃんが大切なんだね…すごいなあ　　）

何度、提案しても我慢して耐えようとするアスカにナハトは強硬手段として軽く魅力しているのだが、すぐに正気に戻ってしまう。もう、そんなやり取りが何度も行われていた。

（ぜったい！ぜったいに屈しないんだから！あのモフモフは私の手で独占するまで触らないんだから！）

もつとも、ナハトの感心や思惑とは裏腹にアスカにとって魅了された自覚はない。ただ、自身の誘惑を押さえ込み、必死に耐えているだけだ。

もし、アスカの心の中がレヴィの為ではなく、自身の欲望との戦いだと知ったらナハトがどう思うのか、それを知る者はいない。

「でも、本当に良く寝てるわよね。コイツ　　」

アスカは言いながら指でレヴィの頬をつつく。そう、レヴィは拠点に帰ってきた途端に眠くなり、ナハトが変身した瞬間にしがみついて寝てしまったのだ。

「きつと疲れてたんだよ。レヴィちゃん、今日はたくさんはしゃいだもの。それに泣き疲れてるみたいだったから」

アスカの行為を視線だけで咎めながらナハトは答える。綺麗な毛並

みをレヴィのヨダレで汚されてしまっているが気にしてはいないよ
うだ。たぶん。

「……うゝん…えへへっ……………」

「うわっ…………あたっ！……………」

不意にレヴィが寝言を呟き、驚いたアスカが叫んでしまいそうになるが、ナハトの尻尾がアスカの顔面を強打して防いだ。

「静かにしてねアスカちゃん。レヴィちゃんを起こしたくないから」

「だからって、今のはひどいわよ。結構痛かったわ……………」

恨めしそうにナハトを見るアスカ。しかし、ナハトは気にした様子もなかった。仕方なくアスカはレヴィの事に話題を移す。

「嬉しそうな顔しちゃって、どんな夢を見ているのかしらね」

「きつと楽しい夢だよ…平和だったころの……………」

アスカの質問に答えたナハトは悲しそうに呟く。かつての平和だった時代。取り戻せない過去に思いを馳せているのだろう。

アスカは悲しい話題になった事に舌打ちしながら、無理やり話題を明るい方向に持っていくため、わざとらしく大きな声を出した。

「案外、アタシたちと遊んでる夢かもよ！ほら、私たち四人をレヴィが振り回す夢！」

「もう…………アスカちゃん声が大きいよ」

「ゴメン！ゴメン！」

そんなアスカの気転が効いたのかナハトの声や表情から悲しみの色が消えて、呆れた声になる。

（そうよ、過去に思いを馳せたって意味はない、感傷に浸るヒマがあったら未来に進む努力をした方が絶対いいわ！）

アスカは思うのだ。シュテルは何考えてるか分からないが、他の三人は負の感情に捕らわれすぎている。きっと、アスカでは復讐に走る皆を止められない。だから、今は少しでも皆を笑顔にしていたかった。つらい過去を忘れていて欲しかった。

しかし、そんなアスカの想いとは裏腹にレヴィの口からでた言葉は彼女たちが想像以上に過去に捕らわれている証拠だった。

「えへへ……まってよ……アルフ……」

「アスカちゃん、アルフって……」

「レヴィが生前飼ってた犬の名前ね。今なら分かるけど、実際は家族同然の使い魔の名前」

「それじゃあ、魔力リンクが途絶えたアルフって子は……」

「もう、亡くなってるでしょうね……そうか、だからナハトの変身した姿に飛びついたのね。もう会えないアルフを思い出して」

「でも…私はアルフって子じゃないよ。誰も代わりにはなれないから……」

「そうね……………」

思わずしんみりした空気になり、ため息を吐きながら岩のベツトに座るアス力。

（そうよ、王様。アタシ達だってアンタの家族の代わりにはなれないのよ？王様、気が付いてる？王様がアタシ達を家族の代わりとして見ている事に）

やるせない気持ちになりながら、アス力は眠る必要のなくなった身体を酷使して皆が幸せになる方法を考えるのだった。

「おーい！アルフ！まってよー！」

レヴィは海鳴臨海公園で親友の　と一緒に逃げ回るアルフを追っていた。子犬フォームのアルフは可愛くて、逃げ回る姿はすばしっこい。捕まえようとしても捕まらなかった。　も笑いながら悔しそうな顔をしている。

「楽しい夢を見てください。永遠の間から滲み出た絶望に捕らわれ、苦しむマテリアル。せめて、一時でも苦しみを忘れていて入られるように……今の私にはそれくらいしか、貴女たちにしてやれません……………」

ふと、レヴィの耳に悲しげな少女の声が聞こえた気がしたが、気のせいだろう。

こんな楽しい夢で悲しんでいる人なんていないから、いないから……。

「　次は翠屋でシュークリームを食べに行こう！」

「ええ、構いませんよ　」

レヴィの提案に親友の　も静かな口調とは裏腹に嬉しそうな顔で頷いてくれる。

楽しい夢だ。全てを忘れていられる。悪いことなんて何一つない。

きつと翠屋ではレヴィの母さんと　の母さんが談笑してる。二人の親友　と　が待ってる。最近友達になった　と四人の家族も来ている。

これは幸せな現実。きつと不幸な未来なんてなかった。

「そうだよね、私たちはずっとずうっと幸せなんだ」

「そうですよ　。私たちはずっと幸せです」

ほら、レヴィの親友もそう言ってくれてる。だから、ずっと幸せな現実が……。

（アレ？ボクってアリシアなんて名前だったかな？）

「どうかしましたか？アリシア」

「ううん、何でもないよ」

ふと、感じた違和感。しかし、レヴィは気が付く事が出来なかった。余りにも幸せに浸りすぎて、些末な疑問も溶けて消えたのだ。

しかし、彼女は違った。

「なんとも悪趣味な夢です。王が合わせたい人物はよほど性格が悪いのか、それとも……………」

「ッ!？」

突如として響いた声に夢を操っていた存在は驚いて周囲を見渡す。しかし、誰もいない。当たり前だった。彼女を覆う虚無は生半可な精神力では意識を維持できず、食われてしまう。故に彼女に会えるのは、ただ一人だけだ。

（気のせいでしょう。数多の絶望に耐えて此处まで辿り着ける人間なんていないのですから……………」

少しだけ期待した自身の心に戒めの鎖を打ち込みながら、彼女は再び夢の続きを操作しようとして、出来なかった。

「それとも、一人で全てを抱え込む愚かで優しすぎる馬鹿者なのか、貴女はどちらですか？」

「わっ!……!」

突如として目の前に現れたシュテルに彼女は驚いて尻餅を付いた。

シュテルは一瞬だけ微笑んだ表情を浮かべたが、すぐに無表情に戻り、バリアジャケットのスカート部分を摘んで優雅にお辞儀する。

「ビックリしました。貴女は……………」

「初めまして、ユーリ・エーベルヴァイン。私は星光の殲滅者、シュテル・ザ・デストラクターです」

「マテリアルS。どうやってここに……………」

雷光の少女が楽しい夢を見るさなか、星と紫天の盟主が絶望と虚無に囲まれた空間で必然的な出会いを果たしていた。

私はアルフじゃないよ、レヴィちゃん（後書き）

はい、レヴィ編は終了です。

本当は模擬戦とか牛虻の大群との戦闘とか書きたかったけど省略、長すぎても詰まらない文章にしかありませんから。

次回は盟主と星の逢い引き話になりそうです。

それでは、48時間以内に再び会いましょう。

悪趣味な夢など……私が焼滅させます！（前書き）

気合いと根性で頑張ったら夜になりました！作者の頭がディザスタ
ーヒート（笑）

ユーリを待ち望んだ皆さんごめんなさい。次回までまって欲しい
んだ。

うん。またなんだ。今回は繋ぎの回になります。

悪趣味な夢など……私が焼滅させます！

時は少し遡る。

レヴィ達と別れたディアーチエ達は第97管理外世界に近い無人世界で拠点を構築して、レヴィ達が転移して来られるようにマーキングを施した。

その後、管理局の現状に対する情報収集を行うため、巡回している管理局員の部隊を探していたのだが、何故か見つけることが出来ず、拉致拷問による情報収集計画は難航していた。

現在は消耗した魔力を回復させるため構築した拠点でディアーチエとシュテルは休んでいる状況だった。

「ふむ、草木で作ったベッドの寝心地も慣れれば悪くないモノだな」

ディアーチエはシュテルが草や木の皮を編んで作った布に包まりながら呟いた。体の下に布いてある藁は棘が安眠を妨害しないように、巨大な葉っぱをシーツ代わりにして藁を包んでいる。おかげで固い床の上で寝る必要が無くなり、安眠する事ができた。

「何もない床の上で寝るよりはマシでしょう？王よ。それなのに貴女ときたら『王が粗末で汚いベッドで寝れるか！床で寝た方がマシだわ！』なんて言う始末ですから、臣下の私としては悲しいモノでした」

「ぐっ！？」

だが、ディアーチエの呟いた言葉に返答したシュテルの言葉は多分な毒が含まれていた。

ディアーチエに背中を見せながら、黙々と草と木の皮を編んで必要以上の布団を作るシュテルは集中していて、独り言に反応しないと思っていたディアーチエは急に返された毒舌に悶絶してしまう。

シュテルの追撃は続く。

「それに、王の為にと想って、休む間もなく作り上げたベッドを否定されたその日。私は静かに涙なんて流してなどいませんでしたよ？だから、お氣遣いなく休んでください、王よ」

「ぬわあああああ！あッ！あれはっ、その！正直に謝ろう！我が悪かった！このとおりだ！だから、機嫌を直してくれシュテル！」

さり気なく放たれる毒舌の数々に耐えきれなくなったのか、ディアーチエは草木のベットから急いで這い出るとシュテルに向けて土下座しまくる。

そこに王としての威厳はなく、ただ機嫌を悪くした恐妻の機嫌を取るべく、ひたすら謝り続ける夫のような場面が繰り広げられていた。

「仕方ありませんね。今日の所は許してあげます。願いをひとつだけ叶えてくれるのならば」

「我に出来る事なら何でも叶えてやる！それで良いか！」

「本当ですか？ありがとうございます、ディアーチエ。ふふっ

「

「ん？何故笑っておるのだシュテル？まさか……………」

シュテルが作業を止めてディアーチェに振り向く。その顔はイタズラが成功した子供のように笑っていた。

シュテルに騙されたことに気が付いたディアーチェは顔を瞬時に真っ赤にさせ、立ち上がってシュテルを指差し、口を金魚のようにパクパクさせる。しかし、怒りのあまり言葉が上手く出てこなかった。

「おのれはっ、おのれはっ！」

「ふふふ、やはりディアーチェをからかうのは面白いです。心が癒されます。ああ…先ほどの言質ですが、誇り高き闇統べる王に二言はありませんよね？」

「うぬぬぬ！王たる我を騙すとは！！貴様！それでも我に仕える臣下か！我を敬っておる様子が全く見えぬわッ！！」

「冗談を…それでも王や皆の為に寝る間を惜しんで色々と考えているのですよ？」

「ぐうっ！やはり、こやつには口では勝てぬか……………」

何を言っても柳のように避けてしまふシュテルにディアーチェは不完全燃焼といった様子でうなだれた。王が口先ひとつで理のマトリアルに勝つには、力が足りなかったようである。もっとも、そんな日は永遠に訪れないが。

シュテルは面白そうに目を細めてディアーチエを見ていたが、ディアーチエが気を取り直した時には、いつもの無表情に戻っていた。他者の前で彼女が隙を見せることはない。

「それで？シュテルよ…おぬしの願いは何だ？」

王の問いかけにシュテルは跪くと、真剣な目をして王を見た。その態度にディアーチエは瞬時に気を引き締め、王たる威厳を発しながら理のマテリアルを見据える。しばらくして、シュテルが口を開いた。

「私が王に願うのは王に嘘偽りなく、ある質問に答えて欲しいのです」

「我に答えられる質問なら答えよう。申してみよ」

「では、生前において闇の書の呪いは解決する方法がありませんでした。しかし、今は闇の書の呪いは消え去り、紫天の書として生まれ変わっています。何故ですか？」

シュテルが知りたかったのは闇の書の呪いを消し去る方法だった。シュテルの知る闇の書は破壊と殺戮を目的とした魔導書で、破壊することは不可能だった。封印するしか方法は無かったのだ。

しかし、ディアーチエの持つ紫天の書からは、魔力を無理やり収集させようと、持ち主に対して負荷をかけようとする様子がない。シュテルが自身のプログラムを精査してみても特に異常は見られなかった。

だが、シュテルは危惧しているのだ。闇の書の呪いが消えた訳ではないと……………

（ギル・グレアムやクライド・ハラオウンが何年も掛けて見いだした方法が氷結魔法による封印と次元幽閉です。そう簡単に消える呪いではないはず、恐らく闇の書の呪いは今も生きている！そして、それを抑え込んでいるのは恐らく……………）

シュテルは沈黙したまま微動だにしないディアーチエを睨むように見据える。その表情や瞳に表れる些細な動作も見逃さないように。

「さあ！嘘偽りなく答えて下さい王よ！」

「……………」

しかし、シュテルの叫びに王は答えを返さず、沈黙したままだった。瞳は一切の揺れを許さず、表情は鉄の仮面を付けたかのごとく微動だにしない。

（顔の表情は変わらず、瞳にブレはない。手や足に些細な動作も見せないとなると、動揺すらしていませんね。これでは王の心を読むことは出来ませんか……………）

「ふう……………、沈黙もまた答えです。今日はもう遅いですし、私は眠りに着くとしましょう」

あまり情報の収穫がなかったシュテルは疲れたように、ため息を一つすると、自身のベットに向かう。ふと、振り向いてディアーチエを見やれば王は未だに動く気配はなかった。

このままだと、固まっ たまま一晩明ける気がするので、一声かけておく事にする。

「ディアーチエも眠りに着いて下さい。我々に眠りは必要なくとも、人であった頃のリズムは大切ですから」

そして、草や木の皮で編んだ布に包まると目を閉じてシュテルは眠りに着いたのだった。

楽しいね
！

ああっ！待ってよアルフ！

ほら！
も一緒に追いかけてよ！

目を閉じて眠りに着いたシュテルの耳に聞こえてくる明るく無邪気な声。

その声から発せられる言葉は幸せに満ちていて、世界の残酷さを知らない、不幸を知らない様子が良く分かる。

（これは一体？私の生前の夢でしょうか）

シュテルは状況を確認するため眠気のしない目を開けた。

「なっ！これは一体！？」

そして、シュテルの目に移ったのは有り得ない光景だ。悪く言えば異様な光景。

目に映るは懐かしき風景。海風が吹き、緑に囲まれた海鳴臨海公園。そこにいたのは、生前の友の姿。今は亡き親友の大切な半身。

「レヴィ？アルフさん？いたい？どうして…………？」

「レヴィって、いったい誰？私はアリシアだよ？　　？変な夢でもみたの？」

シュテルが珍しく動揺して、狼狽えているなかで、アリシアと名乗る少女はシュテルの様子が可笑しいのか口を押さえてコロコロと笑う。子犬フォームのアルフもつられたように尻尾を振っていた。

その様子を見て、シュテルは動揺して激しく鼓動を打つ心臓を深呼吸吸って落ち着かせる。

（落ち着くのですシュテル。恐らくコレは夢。私の無意識に抱いた望郷の念が見せる夢でしょう。どうやら私は相当に疲れているようです。こんな夢を見てしまうとは…………）

「どうしたの？　　？まさか…どこか調子でも悪いの！」

思考の海に浸り、考えを巡らすシュテルの様子を心配したのかアリシアは泣きそうな顔でシュテルを見ていた。

「えっ？あっ？私は大丈夫ですよ？レヴィ」

急に泣きそうな顔をしてシュテルの様子を伺うアリシアに調子を崩され、テンパって答えるシュテル。しかし、アリシアはレヴィと呼ばれたことが気に入らなかったのか、可愛らしく頬を膨らますと不機嫌そうに拗ねてしまった。

「だから私、レヴィじゃないってば！もう、心配して損したよ！」

「…………ふふっ」

「何がおかしいのさ！」

かつての親友の変わらない姿が懐かしくて、可笑しくて、つい笑ってしまうシュテル。アリシアが可愛らしく怒っている姿すら懐かしい。

（そうです。何を気にする必要があるでしょうか？所詮はただの夢です。楽しむとしましょう）

シュテルは気持ちを切り替える。今の不幸を一時でも忘れ、懐かしい夢の世界を楽しむ事にした。

「ごめんなさい、アリシア。私が悪かった。謝るので許してくれませんか」

「むう、じゅあアイスおごってよね。そしたら許してあげる」

「ええ、いくらでも奢ってあげますよ。今日の私は機嫌が良いのです」

「ホントに！？やったあ！」

万歳するほど喜ぶアリシアにシュテルは微笑んだ。そう、今のシュテルは不幸を忘れるくらい楽しかったのだ。だから、生前の名前を言われても気にしなかった。

「それじゃあ、さっそくアイスを買に行こうよ、なのは！」

「ふふつ、急がなくてもアイスは逃げませんよアリシア」

その後、アイスを食べたり、公園で逃げるアルフを追いかけて回したり、図書館でアリシアに本を呼んであげたりしながら、なのはは懐かしい時を過ごしていた。だが、終わりの時は唐突にやってきてしまふ。

なのはが違和感を感じたのは、アリシアが言った言葉だ。

「そろそろ、お腹すいたし、翠屋でご飯にしようか」

「えっ 翠屋？」

夢心地で時を過ごしていた、なのははアリシアの言葉で頭が急速に冷えて冷静になる。

（おかしい、私が小学生になるころには母上が作った翠屋は道場『暁』に立て直したはず）

なのはの記憶とは違う差違に霞が掛かった思考が晴れて行く。

「どうしたの？なのは、行こうよ」

「えっ？ええ、アリシア帰りましょう」

（悪い予感がします。外れてくれれば良いのですが……………）

できれば、予想が外れて欲しいと願いながら翠屋に向かうのは。しかし、彼女の願いは容易く裏切られた。

「ただいま！母さん！」

「お帰りなさい、アリシア！アルフ！ありがとうなのはちゃん。いつも、アリシアの面倒を見てくれて。今度、お礼に貴女の好きな物を持ってくるわ」

「いえ、お構いなく。プレシアさん……………」

喫茶翠屋に着いたとき、入り口から出てきたプレシアにアリシアが抱きつき、アルフが擦りよる。誰もが親子が触れ合う暖かな光景だと微笑むだろう。しかし、なのはは違った。顔には憂いの表情が浮かび、齒を食いしばり、手を強く握りしめて…怒りに震えていた。

「どうしたの？なのは、怖い顔してるよ……………」

「きつと、私たちの様子を見て自分も甘えなくなったのね。桃子！士郎さん！早くなのはちゃんに構ってあげて！」

なのはのただならぬ様子を見て怯えるアリシア。プレシアは大人の余裕を持つてなのはの心情を見抜き、なのはの求める人達を呼ぶ。

「ごめんね！なのは、忙しくて直ぐに出られなくて……………」

「なあに、心配しないでよ桃子さん。なのはもおやつをあげたら、直ぐに機嫌を良くするさ」

「もうっ！士郎さんったら、なのは、おやつに母さん特製のシュークリームを用意したわ、こっちにいらっしやい」

翠屋から出てきたのは優しい表情を浮かべた母の桃子と父の士郎。何時までも若々しい、仲の良い夫婦の姿。

しかし、それはなのはの記憶と違う最大限の要素であり、怒りの起爆剤だった。

「レイジングハート、いえ…ルシフェリオン！セツトアップ！」

なのはが怒声を上げて叫ぶと、普段の私服から漆黒の殲滅服へと姿が変わり、髪も短いツインテールからショートカットに変わる。瞳は水色に明るく輝き、闇を凝縮した目に戻ってしまう。

いつの間にか不屈の星に戻っていた少女は、自らの意志で再び星光の殲滅者へと変わり果てたのだった。

「なのはちゃん何を……………」

「やめてよ、怖いよなのは……………」

「お願いなのは、いい子だから大人しくして、ね？」

「そうだぞ、なのは。母さんの言うことは聞くものだ」

突然のなのはの変貌にかつて親しかった人達は動揺し、なのはを落ち着かせようとする。しかし、シュテルの口から出たのは怒りと罵倒の言葉だった。

「口々にさえずるな！塵芥ども！非常に不愉快です……いえ、今すぐ私が消し去ってあげます！そこを動くな！ルベライト！フルドライブ！ルシフェリオン！モードディザスターヘッド！」

「……！？………！」

シュテルは叫ぶと同時にバインドで四人を縛り上げ、空高く飛ぶ。四人とも悲痛な表情でナニかを叫んでいるがシュテルには聞こえなかった。フルドライブ状態に移行するとルシフェリオンの先端を翠屋に向けて、魔力を収集する。忌々しい夢を明星の焰で焼き払う為に。

「アリシア、貴女の母親は生きてなどいないのです。何故なら私と共に集めたジュエルシードを使っても救えず！私たちで看取ったのですから！」

魔力の充填が30パーセントを完了する。シュテルが叫ぶ言葉は過去への慟哭。

「それに父上は決して私に微笑んで下さらなかった！私に武術を叩き込み、いつも厳しくて復讐に燃えた人でした！」

魔力の充填が60パーセントを超える。ルシフェリオンの先に光が

集い、膨れ上がってゆく。

「そして……そして、母様……貴女は私が物心着く前に殺されました！翠屋なんて私は知らない！知っているのは道場暁だ！」

魔力の充填が90パーセントを超える。空が暁に染められ、街を朝焼けの様に照らす星が生まれる。

「この夢は死者を冒瀆する悪夢だ。ですから、私が全力全開で終わらせてあげます！」

魔力の充填が120パーセントまで完了する。後は魔力を解き放つだけだ。

「集え明星！ 全てを焼き消す焰と成れ！
ルシフェリオー
ーッ！ブレイカーーッ！……ッ！」

シュテルの叫びと共に放たれた暁の焰は翠屋諸共、記憶の残滓を焼き払い。海鳴市が硝子のようにひび割れる。そして、明星の光が消えた時、海鳴市は砕け散った。

「ッ！？これはっ、いけません！」

その瞬間、シュテルを襲ったのは明星の光すら喰らおうとする闇と虚無だ。身体は瞬時に見えなくなり、意識しか感じる事が出来なくなる。

（五感が消えた……気を抜けば闇に喰われて消える……恐らくコレが闇の書の闇……まだ、生きていたのですね）

思考だけの存在となったシュテルは意識が喰われないよう、気を強く保ち、虚無に身を委ねていた。下手に抵抗すれば本当に喰われて、闇と虚無の一部に成りかねない。

（今は会えない父上と師匠に感謝を……闇の部分を少しでも知っていたのは幸いでした）

護身術と暗殺術を叩き込まれた時、シュテルは少しでも人間の闇を知ってしまう。当時はショックで食事も満足に喉を通らなかったが、その経験が今は生きていた。

（とにかく、闇の書の闇。その元凶が近くにいるはず。折角の機会です。少し探りを入れましょう）

シュテルは深い闇の中で動く事を意識して、泳ぐように闇の中心へと向かうのだった。

悪趣味な夢など……私が焼滅させます！（後書き）

次回！シュテルの浮気！王と盟主と星のトライアングラー始まるよ！

まあ、冗談です。たぶん……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4631z/>

リリカルなのは アナザーダークネス

2012年1月14日22時36分発行